

山とスキー

第 八 十 號



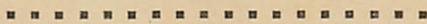
札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和二年三月廿八日印刷納本

昭和三年四月一日發行
(毎月一回)

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次 目 號 十 八 第



記 事

秩父宮殿下を御迎へし奉りて

台覽北大スキー競技會

警備隊の記憶の中より

青山温泉附近の思出

登山史上の人々

海豹皮の利用に就て

海 外 通 信

寫 眞 版

謹 寫

ユートピアに於ける御一行

入場式前の日本選手一行

50K.M. コース途中の永田君—50K.M. 1位Hedlund(Sweden)

| | |
|--------|------|
| 小川 玄一 | 〔一〕 |
| 村本 金彌 | 〔五〕 |
| 井出 英次 | 〔三〕 |
| 大島 亮吉 | 〔二五〕 |
| 伊藤 秀五郎 | 〔三〇〕 |
| 廣田 生 | 〔三三〕 |

昭和三年四月發行



(謹 寫)



秩父宮殿下を御迎へし奉りて

昭和三年二月我々がスポーツの宮として仰ぎ奉る秩父宮殿下におかせられては、畏くも當北海道に御渡道あらせられた。吾々の多年の願望であつた「山」と「スキー」に御親しみある殿下の、雪とゲレンデとに恵まれた此の北の國への御來道は遂げられた。吾々の狂喜したのは云ふ迄もなかつた。

殿下の此の度の御渡道は北海道御視察であつた。併しながら、此の度の御旅行の骨子たる處は「山」と「スキー」に他ならなかつたと拜察せられる。殿下の御來道を待つ事久しかつた札幌郊外の雄大なるゲレンデ、手稻、奥手稻のシユワイツのタンネンに相當する蝦夷松の樹林と、あの絹の褥を思はず粉雪、扱ては白樺と蝦夷松の樹林に圍まれたあのシユワイツ風のヒユツテは、殿下の今度のシー・トゥールにあたつて、殿下の貴きシー・シユプールとヒユツテ御假泊の夜の盡きせぬ御語草を永久に忘れる事は出来ない。

殿下札幌御着の二月廿一日、如月の空は晴れ渡り殿下を御迎へするには此の上ない良い日であつた。札幌神社に詣でられた殿下は道廳、大學行啓ののち午後よりスキーを召され、大學スキー大會に臨ませられた。殿下の御臺臨をまつてジャンプには三十米の記録生れ、日本最初の試みたる五十杆レースは驚くべき好成績を擧げ得た。

翌日札幌郊外に於て、又は手稻奥手稻に於ける殿下の御元氣は溼潤たるものがあつた。今更ながら殿

下のスキーに御堪能なる事を申し上げるのは恐れ多い話であるが、あの山育ちと拜察せらるゝ確實なる御滑降振り、又は直滑降に御樂しませ給ふ殿下のスキー術は只々吾々を驚嘆卷舌せしむるばかりである。

旭川、釧路方面にて北海道の氣分を味はれた殿下におかせられては、三月一日小樽より昆布青山温泉に向はせられた。併し折角殿下を御迎へした青山温泉が天候不良のため雪質不良なりし事と、あの吹雪とは返へすゝも残念であつたが、あの吹雪の時の殿下の『吹雪いてるので大きな山へ登る様に思はれる』との御言葉は如何ばかり殿下が山に御精しきかを御推察するに難くない。

殿下の御渡道によつて北海道の山岳史は一段と光輝を放つた。そして樹氷咲く山々と共に殿下の再びの御來道等待つて止まないものである。

殿下の北海道に於ける御日程は次の様だつた。

二月廿一日 午後九時三十分札幌御着、三井俱樂部御宿泊

二月廿二日 札幌神社御參詣、道廳、大學行啓、午後より大學校内スキー大會御臺臨

二月廿三日 札幌市近郊スロープ御案内、午後より中島公園スケート大會御臺臨

二月廿四日 午前八・五四 札幌御出發

〃 九・一五 輕川驛御着

〃 一・四〇 手稻バラダイスヒユツテ御着

午後一・三〇 ヒユツテ御出發

〃 三・〇〇 手稻頂上

〃 四・〇〇 ヒユツテ御着、ヒユツテ御一泊

二月廿五日 午前八・四〇 御出發

〃 一・四五 奥手稻鞍部にて御中食

午後五・〇〇 ヘルベチア・ヒユツテ御着、御料林の伐木狀況御視察、ヒユツテ御一泊

二月廿六日

午前七・二〇 ヘルベチア、ヒユツテ御出發

〃 九・〇〇 一〇九七米頂御着

〃 一〇・四五 ヒユツテ御着

午後一二・四〇 御出發

〃 二・〇五 遙山南コブのスロープ

〃 三・〇五 同所御出發

〃 三・二五 錢函峠頂

〃 五・〇〇 錢函驛御着

御歸札、三井俱樂部御宿泊

二月廿七日

旭川へ向け御出發、一旦札幌へお歸へりあり三井俱樂部御一泊

二月廿九日

帶廣、釧路方面へ向はせらる。

三月一日

釧路よりの御歸途は札幌へ御立寄あらず午前中小樽市御視察、午後青山温泉に向はせらる。

午後六・一九 青山温泉御着

ニセコアンヌプリ御登山

午前八・二〇 温泉御出發

〃 一〇・五〇 千三百米邊より御引返し。

〃 一二・三五 青山温泉スロープ御着、温泉御宿泊

午後一・五〇 スロープ御出發

〃 二・四五 藻岩山頂

〃 三・三〇 スロープ御着

〃 三・五〇 温泉御着、温泉御宿泊

チセヌプリ御登山

午前八・二〇 御出發

〃 一〇・〇〇 馬場温泉御着

三月三日

午前二・〇〇 約七百六七十米邊に至る

〃 一・三〇 馬場温泉御着 御中食

午後二・一〇 御出發

〃 三・二五 温泉御着

〃 八・〇五 温泉御出發

〃 九・三〇 昆布驛御着

〃 一〇・〇〇 函館に向けせらる。

三月四日

御歸京の途に就かる。

三月二日

午後六・一〇 山崎御着

三月一日

午後一・〇〇 山崎御着

二月廿九日

午後一・〇〇 山崎御着

二月廿八日

午後一・〇〇 山崎御着

二月廿七日

午後一・〇〇 山崎御着

二月廿六日

午後一・〇〇 山崎御着

二月廿五日

午後一・〇〇 山崎御着

台覽北大スキー競技會

小 川 玄 一

秩父宮殿下の御臺臨を仰ぎ北大スキー部校内大會が二月廿二日札幌郊外三角山を中心に行はれた。この競技會は北大スキー部員が本シーズン中研究錬磨した技能を思ふ存分明示し得べき、言はゞ北大スキー部員の本シーズンに於ける總決算であると同時に技術、規定、種目等に關し來シーズンの方針を定むべき極めて意義ある大會である。しかもこの意義ある大會に秩父宮殿下の御臺臨を辱うしたことは吾々一同無上の光榮とするところであつた。特に北大スキー部員はさきに大饗に於て御英姿を拜し爾來朝な夕なに殿下を御慕ひ申し上げ、御來道を待ち居たのに再び御英姿を拜し、あまつさへ畏くも殿下御手づから光榮ある學生聯盟スキー競技會優勝賜盃を賜はつたのであるから一入感激を深うした次第である。

午前十一時氣温は三度、午後二時零下一度、春光は照り輝いて、いやが上に大會の盛大さを微笑むが如く、札幌に於ける當日のコンディションとしては大体に於て良好なるものであつた。

一、復合競技十五料レース

大正十五年二月北大スキー部校内大會の際本邦スキー界に卒先して復合競技を始めて以來二年目、今回のインターナショナル・オリンピックックススキー競技會にすでに本邦選手が出場し、或は又學生スキー聯盟競技會にも其種目を見る様になつ

たにもかゝはらず、單なる時間的關係より名實ともに本邦に於ける最高の權威を持つ全日本スキー聯盟主催の競技會より其種目の今もつて除外しあるは、吾々の最遺憾に思ふとともに心外にたへぬものである。それ故北大スキー部に於ては僅一日の競技會に於て複合競技の無理なるは万々承知の上なれど複合競技の研究と、本邦スキー界の複合競技に對する注目を得んが爲めこゝに再び行ふ事とした。

複合競技十五籽レースは午前十一時〇一分久々津、杉村、村本、宮村、長尾の順にて第六回全日本スキー選手權大會の際使用せる十五籽コースをそのままにスタートは切られた。十五籽レースに於て點數を得んとする久々津と本日の優勝候補たる大鰐の優勝者村本とはスタートに於て最も優勢にして、久々津、村本の間にはさまり最も不利な杉村並に新進の宮村、幾分練習不足の感ある長尾はまづ伯仲せるものであつた。S點に於ては久々津元氣なく、杉村、村本、宮村優勢なりしもD點より久々津盛りかへし一度抜かれたる杉村、村本を抜きかへせるに反し、杉村、村本は次第に引き離され特に村本はコンデーシヨンの悪しきことと、午後のジャムプを懸念しD點にて棄權するにいたり、結局次の成績にてゴールインするにいたつた。

全体としてタイムの不良は各競技の終了後僅二時間程の後には本競技に出場せる選手がいづれもジャムプ並に複合競技ジャムプに出場する爲め、審判員の方にてインターナシヨナルのルールにならひ複合競技ラングラウフの所用タイムを指定しおかなかつた。それ故各選手は幾分餘裕ある疾走をなせる爲ではなかつたであらうか。

| 出發順位 | 姓 名 | 記 録 | 點數 |
|------|--------|-----------|-------|
| 1 | 久々津 浩二 | 1時 30分 0秒 | 20點 |
| 2 | 杉村 鳳次郎 | 1 46 30 | 11.75 |
| 3 | 村本 金彌 | 棄權 | 0 |
| 4 | 宮村 六郎 | 1 44 30 | 12.75 |
| 5 | 長尾 健一 | 1 52 30 | 8.75 |

二、五十籽レース

『とうとう五十籽をやるか』……と言ふ秩父宮殿下御來道の折車中にての御言葉は僕等にとつてどのくらゐ有難い御言葉であつたか。そして僕等をどのくらゐ勵ます御言葉であつたかおしれない。五十籽は僕等が一昨年校内大會の時初めて複合競技をやつた頃からすでに其實現に志してゐたのであつた。そして其實現の第一歩は昨年故岡村源太郎君の札樽三十二籽(タイム三時間十分)の獨走により、或は又昨年の全日本スキー聯盟代表委員會に於ける北大スキー部の提案によつて成立した本シーズンの三十籽の實現(二時間卅七分卅秒)により着々五十籽レースの實現に近づきつゝあつたのであるが今回派遣選手五十籽の報知を得て、いよいよ本シーズン校内大會に於て五十籽競技を行ふことに決定したのである。五十籽競技は以前には一体自分等には五十籽のコースを疾走し得るか、つまり体力が問題であつたのであるが、派遣選手の通信などからして此度は疾走のつゞくつゞかぬと言ふ体力は問題でなく、タイムを頭腦にうかぶる様になつた。

五十籽ダウエルラウフはシャンツエ下よりスタートし火藥庫を通り、小別澤に出で、發寒川に沿ひ躑躅山までは道路をつたひつゝシルバースロープの麓を通りD點に出る。それより十二軒澤を登り、瀧の澤のランプに出で之より下つてゴールインする所謂三分の一システムの廿五籽コースを二回使用するものであつた。廿五籽の二回廻りはランナーには誠に氣の毒のことであつたが當日降雪ある場合の道づけ困難並にオプザバーの不足等の理由からして據無い事であつた。然し廿五籽二回廻りにても尙オプザバー少く、従つて途中食物、飲料水の供給不充分にして多數のランナーが一回過ぎて二回目の疾走にうつれる際、途中より空腹のため疾走を中止し棄權を餘儀なくするにいたつたことはかへすがへすも残念なことであつた。

雪のコンデーションは登り特に谷間に於ては粉雪にして、降りは日が照る爲め水を含みザラメ雪となり、各選手のクリステル使用と相待つて最良のものであつた。

此競技は零時一分小池、山田、宮本、宮下、奥井の順にてスタートされ、初めはどれも元氣に疾走し特に宮下は最初より猛烈なるスピードにて小池、山田、宮本を追ひ、小池はストツク破損の爲め8點にて棄權せるもD點に於ては宮本は山田を抜き、宮下又山田、宮本を抜き、第一回廻り最後には宮下所要タイム二時間二分にて先頭に立ち、之より八分遅れて宮本、十二分遅れて奥井、廿五分遅れて山田の順にて二回廻りにうつれるも山田空腹の爲め棄權し、一時盛りかへして宮下に猛烈なスピードで追ひ迫つた宮本も之又空腹の爲めゴール前七籽程の地點に於て棄權のやむなきにいたり結局ゴールインせるは宮下、奥井の二名にして成績は左の如くである。之を要するに出場者全体の半数以上が棄權せるは遺憾とする所なるも宮下、奥井の二選手が四時間臺の實にすばらしきタイムを出せるは寧ろ驚異に價すべき好成绩と言はねばならぬ

| 出發順位 | 姓 | 名 | 記 | 録 |
|------|----|----|----|------------|
| 1 | 小池 | 健兒 | 棄權 | |
| 2 | 山田 | 克己 | 棄權 | |
| 3 | 宮本 | 正雄 | 棄權 | |
| 4 | 宮下 | 利三 | | 4時 25分 20秒 |
| 5 | 奥井 | 義雄 | | 4 56 5 |

三、七籽レース

北大スキー部が事業遂行上最も最近苦心し居るは競技上のごとで、特に年々卒業し行くジャムパー、ランナーの補充をする爲めの新しき選手の養成である。學生が試験の爲め最も苦しむ三學期が雪のある時だと言ふことに愚痴を言つてよいのか、雪のある最中に試験があると言ふことに不平を述べてよいのか、どちらにしる入學試験準備で最多忙な二學期から三學期にかけてスキーを一生懸命やるのであるから、之が兩立せぬのは無理からぬ事である。それに官立學校の悲しさ優秀の選手の入學が少いと言ふよりも殆んどない。それ故に今迄であるとスキーに對し全然経験のない人から養成して行か

ねばならぬ。つまりそう言ふことから出場者がアマチュアからなる此Bクラス競技がジャムプに於てもランゲラウフの七
 秆レースに於ても必要になつて來るのである。つまりBクラスの競技は一方に於て初めて競技をやり出した人が腕試しを
 すると同時に、一方には又其中から優秀の選手をよりぬくのである。

七秆レースは午後零時廿一分全日本スキー選手権大會リレーコースをそのまゝ使用し、中島、中山、中條の順にスター
 トを切り同競技出場者十二名のラストに同競技の参考タイムを見るため中村新一郎が後を追ひ左の如き大体良好の成績を
 得た。

| 出發順位 | 姓 名 | 記 録 | 成績順位 |
|------|-----------|------------------------|------|
| 1 | 中 島 正 | 44.00 <small>歩</small> | 3 |
| 2 | 中 山 清 亮 | 46 | 7 |
| 3 | 中 條 龍 震 | 1 10 03 | 11 |
| 4 | 吉 田 賢 賢 | 39 25 | 1 |
| 5 | 荒 木 | 44 08 | 4 |
| 6 | 黒 田 | 40 57 | 2 |
| 7 | 安 田 | 45 58 | 6 |
| 8 | 岡 田 | 1 07 58 | 10 |
| 9 | 大 野 | 50 14 | 8 |
| 10 | 戸 倉 | 54 59 | 9 |
| 11 | 柳 原 | 44 35 | 5 |
| 12 | 中 村 新 一 郎 | 36 21 | 番外 |

四、ジャムプ競技

全日本選手権大會の記録廿八米の發表以來、大會前練習中卅五米迄での記録を出してゐた札幌シャンツェと北大スキー

部ジャムバーは、多くの人々から疑問の的となつてゐた様である。そして本大會は其疑問を解決する最良の機會であつた。そう言ふ意味でまづシャンツエの手入を行ふ事とし、ジャムバー一同協議の元にシャンツエを三米さけコンケーブのアプローチを直線的となし、アプローチに於けるスピードをシャンツエの端に於て失はれぬ様になし、午後二時卅分殿下の御台臨を待ち中野誠一、後藤一雄、平塚直秀三氏の飛型審判の元にAクラス、Bクラス、複合競技のジャムブを一緒に、Aクラス複合競技は上段、Bクラスは中段よりスタートし、Aクラスは三回、複合競技のジャムブ並にBクラスは二回の飛躍をなし、Aクラスは距離のみにより順位を決定することとし開始されたのであるが、ジャムバーがシャンツエの手入後の練習不足と之に加ふるにアプローチの狭き事、午前中の日射により幾分溶けたるアプローチが午後になり氷り氣味となりたることによりクロウチングダウンの際スキーが揺れ、第一回不倒者はAクラス十二名中神澤、杉村、清水、Bクラス十二名中坂井、植地、複合競技ジャムブ四名中杉村以上六名、第二回Aクラス神澤、伊藤、杉村、Bクラス坂井、植地、村井、複合競技ジャムブ杉村以上七名、第三回Aクラス神澤、伊藤の二名のみでかく豫想外の不成績を見るに至れるは遺憾の極である。たゞ其處に伊藤健夫の最長不倒卅米と、武野毅二郎の着陸の際をしくも倒れたるにせよフライトに於ける屈身姿勢つまりタムス型は本競技の收穫とせねばなるまい。

最後に第一回の飛躍に際し危険なる着陸により觀衆を驚かさした長尾健一のジャムブにつき一言述べれば、要するに其原因はラングラウフの際ストック破損其他によりかなりの疲勞をなし、ジャムブに最も必要なる体的並に精神的冷靜さを欠いてゐた爲めサツツの適當な瞬間と適當なサツツモーションをなし得ず、右側にまがれる姿勢にて極度に早いサツツをなし、台をはなれる餘程前にフォールラゲにうつつてゐた爲め、速度の爲めのVと体重Wとの合力V'と作用Rとの爲にVを生じ益々フォールラゲを助けたことによりフライトに於て全く体の自由を失ひ、胸より着陸せるものではあるまいか。

| | | |
|---|-----------|--------|
| 1 | 神 澤 謙 三 | 17.55點 |
| 2 | 伊 藤 健 夫 | 14.74 |
| 3 | 杉 村 鳳 次 郎 | 14.22 |

(最長不倒 30.0米 伊藤健夫)

ジャムプ Bクラス

| | | |
|---|-----------|--------|
| 1 | 坂 井 龍 二 | 20.00米 |
| 2 | 植 地 勝 太 郎 | 19.75 |
| 3 | 村 井 延 之 | 9.00 |

複合競技 ジャムプ

| | | |
|--------------------|-----------|---------|
| 1 | 杉 村 鳳 次 郎 | 18.01點 |
| (複合競技總點數 杉 村 鳳 次 郎 | | 14.88點) |

警備隊の記憶の中より

村 本 金 彌

一日一日と雪が目に見えて少なくなつて行き、道路は汚い馬糞でいつぱいになり、スキー靴の活潑な歩行を邪魔する様な今日、只思ひ出されるのはあの粉雪の中を思ふ存分に享樂してゐた冬の盛りであります、スキー靴の活潑な歩行を邪魔する様な

三角山の南の斜面が雪崩れで眞黒い土を見せ、生新しい草の香を漂よはせてをりますが、それにつれて亦あの猛漚い暴れ狂ふ吹雪の中のスキーの勇ましさを思ひ浮べては、過ぎし冬がたまらなく懐かしく思はれます。

まして何時もの冬とは異なり、この冬は吾々が一重に敬慕して止まないスポーツの宮様秩父宮殿下の御成りを忝ふし僅々二週間の短い時日ではありましたが、或ひは三角山のスキー競技會に、或ひは手稻奥手稻、又は青山温泉に於いて遙かに殿下の御英姿を拜し奉り、又は殿下の偉大な御人格を仰ぎ見まして私共が受けた感銘は吾々スポーツをやる者にとつては一入と深いものであります。

吹雪の中を御厭ひもなく、御勇ましく北海の雪を樂しまれた手稻山の頂上附近の事や、又は針葉樹に包まれた美しく奥手稻の御滑走、それに伴ふバラダイス、或ひは「山はヒユツテを償す」とまでに山崎先生が申された通り、附近の森林や山々の美しさ其の中に立てられたヘルベチャヒユツテの一夜の御假泊など、又遠くは青山温泉に於ける秀峯ニセコアンヌブリの御登山、近來稀に見る吹雪の中を御勇ましく御登りになられたチセヌブリ、最後に青山温泉、御出發の際の眞黒

い闇の中に荒れずさんである吹雪の中を提灯の明りもほのかな馬橋の長列、何一つとして懐かしい思ひ出とならないものはなく、只幻しの如く、我々の頭の中に懐かしい楽しい光景が一筋の糸をたぐる様にそれからそれへとたぐり出されるのであります。

さて、あの時に警備隊の一人として、御一行と行を共にする光榮を得ましたが、當時の手稻奥手稻の一寸した思ひ出をつたないながら書いて見様と思ひます。

二月廿四日、中野誠一、後藤一雄兩先輩を班長とせる我々警備班なる一行は、殿下の御一行より一足先に輕川で御待ち申すために、午前七時半の列車に乗るべく、腰には大刀ならで警備班第何班何某なる嚴めしい木の札をさけ真黒い面をひつさけて札幌驛頭に集まる。

汽車は動き出して、愈々三日間の榮ある旅行のスタートは切られた。並居る車中の連中は日燒の顔に真白い齒並みを見せて一層の輝かしさを見せてゐる。輕川驛に午前八時着、清楚な町の御奉迎振りに感心させらる。殿下御到着までは約一時間餘あるので皆んなスキーにワックスを塗つたり、或ひはアザラシの皮を張り着けたりスキーの手入に餘念ない。誰やらがこのアザラシの皮は毛が立ち過ぎて、狸の皮だなんて言ひ出して皆んな笑せる。それ以來登る事にかけては非常に高價な値をもつアザラシも狸なるニツクネームをつけられてしまつた。

やがて、御召列車が着くとこの知らせ、皆んな停車場の出口の兩側にならんで御着を待つ事になつた。御召列車は構内に入り、やゝあつて宮様には御日燒の御尊顔に晴れやかな御微笑をたゞへさせられながら、輕川驛頭に御姿を現はされ、奉迎の人々に一々可憐なる御會釋を賜はらせ、御自ら重いリツクサツクを背負はれ、スキーを肩に、スポーティな御足取りで輕川神社の境内まで御歩きにならせられ、其處よりスキーを御履きになり、御奉迎の人々の萬歳の聲に晴れやかに御答へになり、御付きの一行十人を従へられて、愈々手稻山バラダイスヒュッテ目指して御登りに成られた。此の日午前中は前日種々の準備で山へ多數の人が登つたために、雪が軽く踏み堅められてスキーでは一寸不快な感じを與へらるゝ位であ

つたが、天氣は晴朗にして、殿下の御旅行の幸先が非常に宜ろしいので、吾々口善惡のない者がとう／＼おそれ多い事ながら今日の様に天氣晴朗の日寄を殿下日寄りと稱する様になつたのも誠におそれ多い事である。

十分ばかり遅れて、吾々警備班が後をお付申す事になつた。とにかくその他の關係の人々などが多勢混ざつて、蛇々々蛇の感がないでもない位であつた。だん／＼登るにつれ石狩の平原が一面に見渡され、遙か彼方に銀蛇の如き石狩川が見える。吾々は殿下の御一行を邪魔しない様に、御一行と一定の間隔をおいて登る。時々殿下の御一行が眞白い雪の上を鮮かにジクザックを切つて登つて行くのが拜される。

十時頃になつて日が盛んに照りつけ、雪はバンバンに堅められてゐるので、スキーよりも歩いた方がよいと不本意ながらスキーを擔いで登る。夏道を一直線に登る爲め直ぐと御一行に追いつきさうになるので、間隔を保つために時々休む。休む度毎に新聞社の御方から警備班は頭が古いか、横暴とかの御叱言を頂戴するにはやり切れない。だが、晴れた日なので彎曲せる石狩の海岸、遠くは増毛の連山がはつきりと姿を見せてくれるのが何よりの慰めだつた。碧空に暑寒別の連山がくつきりとその山容を見せてくれて、あすこはよい山だと何時でも天氣になつて、山が見える時は褒めて居た故岡村の源さんを思ひ出す。

千尺高地に着いた時はそろ／＼空模様が變つて来て、雪がちら／＼とふつて来た。今までスキーをかついでゐた連中はもう「ガラ／＼スロープ」を享樂すべくスキーをつける。雪はますます／＼降つてくる。今時の此の邊の雪としては充分な程良い雪である。雁皮平のスロープで殿下の御一行が降りしきる粉雪の中でスキーの御練習中なので、下の方で吾々は休息丁度その時、宮下、中村のデイスタンスの猛者が殿下のアザラシ皮をもつて輕川から追ひついて来た。本職とは言へその馬力には驚き入るばかり。

雪は稍々小降りになつた様である。御一行はバラダイスを通過して私共の愛する小屋へ御着になつたのである。私共が夏材木を上げたり色々な勞働をし、そうして出来上つたこの小屋に私共が敬慕し奉る秩父宮様が御宿りにならせらるゝ事

はほんとうに光榮此の上もなしで何んと言つてよいやらわからない位である。宮様がヒユツテで御晝食を取られてゐる間吾々もそこから少し澤を下つた所にある會計課のたまりへいつて、暖をとつたり、飯を喰べたりして宮様の御出發を待つてゐた。通信其の他の事で色々、この澤にもテントが張られ山の中とは思はれない位である。

午後一時三十分、宮様はヒユツテ御出發。宮下と自分がおくられて出る。雪は亦ひどく降つて来た。全然ブルフェルシユネーで平常かたまつたバーンでばかりトレイニングしてゐた吾々にとつては、之の雪が何よりの慰め、只うれしくなるばかり。山に來た氣分の良さと雪の良さのために、大切な御供してゐると云ふ事を忘れて、思はず宮下と大聲にて歌をどなる。氣が付いて二人であわて、口をつぐむ。

二人ともアザラシをつけて登つたので、その登りの樂さといつたら何にも例へ様もない。これならもつと早くから使へばよかつたと二人で苦笑す。第二の澤の中頃で宮様の御一行がふりしきる雪の中をもとせす御登りになつて行くのを拜す。それから急いで警備隊に追ひつき御一行の御後を御供する。

氣温は大分低くなつて吹雪も強くなつて來たが、その吹雪の中にかすかに御一行の行動が見える。雪は猛烈に良くなるばかり、午前中溶けて堅くなつた上に、粉雪があまり深くなく積つた。北海道特有の粉雪になつて來た。皆んなが異口同音にこの雪なら宮様も御満足であらせらるゝとさゝやき合ふ。丁度吾々が二の澤を登りつめて頂上へ向ふ途中に、猛烈に吹雪が増して一寸前が見えない位になつて來たが、其の中を宮様の御一行がしつかりしたお身拵へで滑走せられるのに會つた。吾々が敬慕する殿下其の中を鮮かに御滑べりになつて來られたので思はずシーハイルを叫ぶ。御沈着な御滑走振は吾々の一重に驚き入るばかりであつた。それから十分ばかり後に、吾々も滑走をつゞけて樹氷の咲いた針葉樹、雪は良し、その間を縫ふて、各自得意の妙技を振ふ。實に其の鮮かさは見事なものであつた。團子坂までの間は實はスキー家にとつてはほんとうにパラダイスだつた。其の中に殿下の御一行が團子坂より引き返へされたのでしばらく休息、上を見れば宮様には吹雪の中を御一行と共に男々しくも林の中を縫つてジグザックを切られてゐる。其の御英姿は何んともい

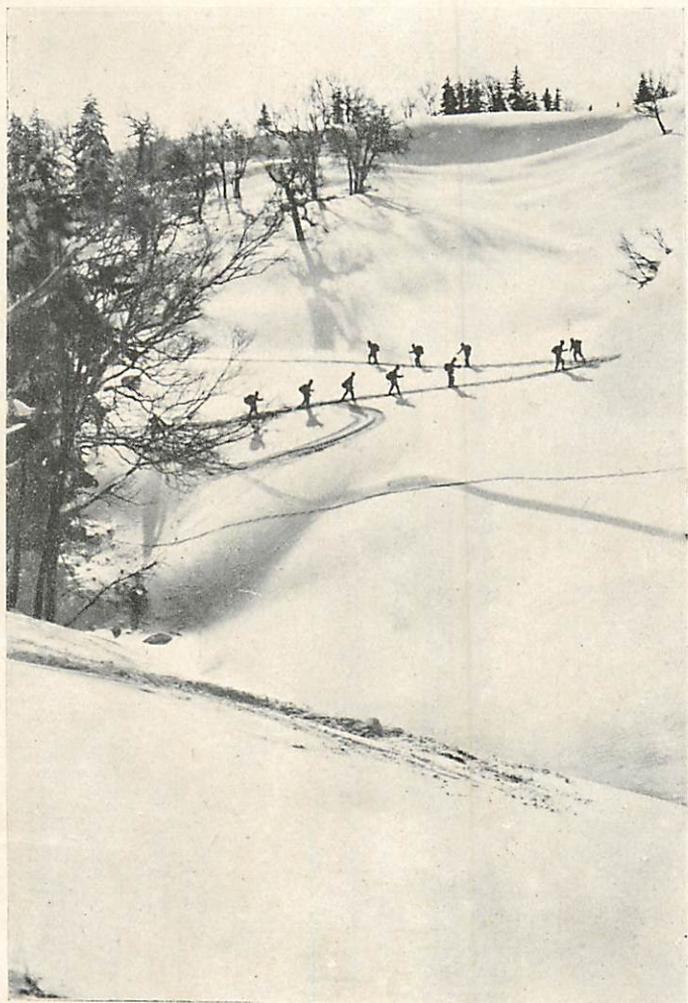
へす神々しかつた。

上でしばらく雪を御享樂なされてゐる御様子なので、吾々も下の方で思ふ存分享樂する。皆んな眺望のきかないのを残念だと言ひあつてゐたが、後で大野先生の御話によると、宮様には「眺望はきかなくとも雪がよいから」と仰せられたとの事、それほど今日の雪質はよかつた。皆んなが享樂してゐる、中野先輩今さらながら後輩の技術の進歩に驚き入つたと云ふ顔で立つてをられたが相變らずの痛快な彌次でもつて皆んなを笑せ、ほんとうに今度の御供は吾々にとつてはたのしい御供だつた。吾々がもう前に出られた古い先輩連中と、こんなに愉快にスキーを享樂する事はおそらく出来ないだらう。御互に減らず口をたゞき、そうして自然の美しさに親しみ、夫の中に新しき者は古い昔をなつかしみ、又古いものは今の新しさを見、實になんとも言へないそこに美はしい融和がかはされてゐる。おそれ多い事ながら皆んな宮様の御蔭の様な氣がする。

ネオバラに出るかと思つたら出ずに、二の澤からヒユツテに歸るらしい。大分御一行とはなれておゐる。いつもよりも氣が張つてゐる爲か樂に降りらるゝ氣がする。中頃迄下つたと思つた邊に、木原さんと前田さんに出會ふ。もう宮様は大分先に御下りになつたらしい。警察の人々や、その他の人は登りと異り降りは大分困難らしいがそれでも何れも皆んな元氣だつた。

四時二十分頃ころけて眞白になつた者、降りしきる雪で白くなつた者、ゴロ／＼ヒユツテの上に集まつて来る。宮下が眞白けになつて来て、今更ながら自分の安價な洋服なる事を痛歎して皆んなを笑はせる。

宮様はと遙かを見れば御元氣にも、吹雪の中を御厭ひもなく、そこらでスキーの御練習の最中、吾々の元氣のなさが恥かしい次第、皆んな集まつて今日御警備の役目もすんだので吾々の宿舍たる輕川の光風館へ下る事になつた。皆んな大聲で歌をうたひながら滑つてくる中に吹雪の中から宮様の御姿が見へたので、皆んなその御元氣に異口同音にシーハイルを叫ぶ。宮様にもそれに御可憐に御會釋を賜はられたので吾々一同感激おくあたはず、吹雪の中をもとせすバラダイス迄



ユートピアに於ける御一行

一散に降る。そこへ来た時に吹雪もやうやくおさまり、朝里の方の山々には少しの夕やけが見えた。ほんとうに靜かになつた。吾々は感激深く一同沈黙の中に、馬橋道を滑つて行く。しばらく降つて行つた時にギャップで龍田が物凄く轉ぶ。そこで始めて今迄の沈黙が破れ高らかな朗かな笑ひが澤にひびく。六時頃輕川の光風館に着いた。

一行十九名其の夜はたのしかつた今日のことども、亦遙かに拜した宮様の御英姿について敬慕の余り色々話しの花が咲いたが、明日は亦五時に起きてバラダイスヒユツテ迄行き、午前八時の宮様御出發に間に合せなければならぬので、万々の仕度を整へて九時頃には皆んな寢につく。光風館の名の通り風通しが良過ぎて寒さの爲めに度々目を覺ます。

しばしまどろむ中に時計が四時を報じたとの知らせにねむい目をこすりながら、夢中で仕度をする。寒い中にふるへながら朝飯を濟ませ、身体の節々のいたむのを我慢して五時に出發す。充分まだ日はあがらぬ、谷々を通して赤い太陽の光りが射して来る。ほんとうに清々しい朝だ。さつきの不快な気分はどこへやら、この分なら今日は快晴だらう。昨日と同じ馬橋道を登る。やがて雁皮平に出た時は日はすでにあがり、オレンジ色の太陽がまぶしい位に光を投げる。ヒユツテの前の林で休む。小屋からは多分朝けの煙だらう、ゆるやかに煙が立ちのほつてゐる。何んと云ふ落付いたすが／＼しい朝だらう。おまけに今日の行を祝ふてか、ぬぐつた様に快晴、「今日こそほんとうに殿下日和だ」と誰かと叫ぶ。

八時四十分頃宮様には小屋を御出ましになる。いつもの晴れやかな御尊顔を拜しては一同感激して勇み立つ。やがて御一行は奥手稻へと、朝日を浴びながら進んで行く。昨夜降つたか、この澤には昨日のスプールのあと方なく消へて、今日は亦バージンスノウを氣持ち良く踏みこたへて行く。一ノ澤へ出て、そこから手稻の頂上の崖をすぐ上に見て腹を切つて進む。木の間、木の間には鳥が朝の空氣をいっぱい吸ひ、日の光を浴びながら宮様の御成りを御喜び申しあげるかの如くに樂しげに囀つてゐる。腹を切つて行く中に一寸した難所があつたが、何の障りもなく進む。林をぬふて、せまくなるしい腹をたくみに進んで行く宮様の御一行が木の間がくれに見へる。あまりの朗らかさ、あまりの嬉しさが遂高らかな歌となつて、口からほどばしる美しいメロデーが朝の谷間の空氣をゆるがせる。小鳥もそれに和してゐる。何んたる美しさであらう。

其處から九七一米に登る時は一寸尾根へ出る、日の光を身体いっぱいにあびる。針葉樹が美はしい。左手に遠く天狗、烏帽子嶽が見え、右手には大曲りから石狩の海が一眺の中に入る。宮様の御一行は今正に九七一米に御着になられんとしてゐる。奇麗に切られたジックザツクのスプールがくつきりとつき、ほんとうに鮮かに見えた。宮様にはと遙かに拜すれば昨日の御疲れも御厭ひなく重たいリュックを肩に、勇ましくも御登りに成られてゐる。今さらながら今朝の不平が恥かしく誠に恐れ多い事に思はれる。

九七一米の所に御登りなられて、そこでしばらく御休みになつて居られるらしいので、吾々も下の方で休む。晝近くなり腹がへつたので、少しばかりの食物を攝る。そこには色々な人々が集まつてゐる。學生、新聞記者、活動寫眞屋など實に愉快な相を呈してゐる。やがて吾々も登り初める。天氣は益々良し、丁度登り詰めた頃には宮様の御一行は奥手稻の頂上めざして御出發にならせられた。吾々は登り詰めた所で晝飯をたべ御一行との間隔を保つために、しばらくそこで綺麗な雪を享樂して待つ。やがていゝ時間を見計つて、この林の中を一氣に飛ばさんとスタートを切る。雪は良し、林は美しくおまげに天氣は良好、眞にこれなら奥手稻のユートピヤなら眞の雪のユートピヤに近づかんとするの感がある。森林中の鮮かなスラロームは、各自のスキー技術に對して遺憾なく満足をもたらしたであらう。やがて奥手稻の鞍部に殿下の御一行が御晝食を御攝りになつておられる御様子なので、その近くで吾々も一しよに休息する。宮様も一日と御日燒が増されて如何にも御樂しげの呈と拜され、吾々も亦更に何んとも言へない嬉しさを感じた。御晝食がすんでから御一行は其處で宮様を御中心にスキーの御練習の後間もなくすぐ目の前なる奥手稻の頂上に向はせられた。吾々は其の間に、丁度其處は鞍部なので一方からすべつてくると、御互ひに裾の方がゲーゲンハングになつてゐるので面白く充分享樂する。しばらくして御付の人々の一人なる先輩の木原さんが、鮮かな直滑降で来る。それから一人また、その中に誰かどあゝ宮様がお見えになつたと云ふがなか／＼御見へにならない。どうしたんだらうと御案じ申上ける中に、小栗がおりて來て宮様にはスキーをバンドの所から御折損になられたとの事を告げた。其の中に宮様には御折損のスキーで巧みに、確實におりてこ

られ、宮様の御つゝがなかつたのを拜してほつと安心申した次第である。

やがて、それも御付きの學生が應急修理を施して、之れからヘルベチヤ迄には御差支へない位になつた。宮様にはさも御満足氣に御穿きなされましたが修理の完全でないため、スキーがカタ／＼鳴るのを御付の人が「宮様のスキーは鳴物入りですね」と申し上げると、宮様には朗かに微笑ませられた。一同もこれを聞いて皆んな一様に微笑んだ。

シー・ロイフェルにとつてスキーを折損すると云ふ事は實に何んともいへない沈痛なものである。吾々は宮様の御心持を御察し申して誠に恐れ多く思つてゐたが、宮様の朗らかな御笑ひを御聞きしてやつと救はれた様な氣がして感激する。

大分豫定の時間を過したので、宮様の御一行は吾々の仲間にそうよばれてゐるあのユートビヤに向けて出發さる。一同は美しい林の中を雪煙りを立てゝ縫ふて行く、御一行を見送りながら、しばらく時間をおいた。こゝでは短い時間ではあるがスキーテクニツクの變遷を見せられた昔の人のやつたスキー術、今の人々のスキー術、實に御互ひに鮮かなものだつた。此の時後藤先輩の國寶とも稱すべき跪座制動を見せつけられ今更ながら昔の人の頑丈な足、確實なテクニツクには驚かされる。中野先輩之を側で見えてゐて、古い者の術を見たかと云ひたけな悦に入つた顔が目にかぶ。何にしる此の時は先輩連中に鼻を高くされて、若い連中は苦笑する。鮮かなスウィング、愉快な轉倒、彌次り合ひ、高らかな笑ひが渦をまいておこり、實に何んともいへないアトモスフェアが醸される。

時間が來たので中野班長の命令一下、下る事にかけては人後におちないと云ふ連中ばかり一氣に宮様の後を追つて下る何る程、ユートビヤの名にそむかず圍味をおびた丘に大きな針葉樹が生へてゐる。見ればそのスロープを御一同が綺麗なジグザグで御登りになられてゐる。

たまらなくなつたらしい、誰やらが林の空所を見出して見事な直滑降、鮮かなスウィングで身体を雪煙りの中へかくす之を見た連中、してやられたりと思ひしか、之また四、五人鮮かに入りみだれてスラローム、だん／＼弱くなつた日の光をあびて、更に何んともいへない美しく美しい光景である。

ユートピヤに登り詰めた時には宮様の御一同が下りる仕度をなされて、丁度其の時新庄さんと、おまけに瓜二つな渡邊御用掛りが寫眞をとつてゐたが、黒さと云ひ何んと云ひあまりよく似てゐたのには皆んな驚く。

宮様の御一行はいよ／＼こゝを下りられて、ヘルベチャに向けて御滑走を始められた、宮様のスキーは餘程滑るらしい。恐れ多い事ながら、がつしりとした御身体でスピードを物ともせず、御付きを離して鮮かに御滑走遊ばされる御様子を拜して皆んな思はず快哉を叫ぶ。

やがて、御姿が下の森の中に没してしまふ頃、吾々もこゝを出發すべく仕度をとゝのへる。誰かどさつき登つて來た所を直滑降をやらうではないかと云ひ出す。しかもその道や好きな道、一同ソレッとそこへ行く、あまりの急なのと下がせまいのでさつきの勢ひどこへやら、御互ひに先を譲りあふ。後藤先輩、先づ確實な滑走振りを見せて、鮮かなテレマークで止まる、悠として。何んだ若い元氣なくせにと相變らず彌次をとばす。精悍宮下、思ひきつて雪の上から眞しぐら。然し相當な雪庇だつたので五尺十一寸の身体が見事に雪まびれになる。

誰やらが亦負けじとやりだす、相當なスピードらしい。下がせまいのと急に澤になつてゐたので、止めるに止められず思ひ切つて飛上り、向ふの土手腹に蛙つぶしになる。上ではワツとと喊聲が上る。スキーは折れたらしい。

中野、後藤兩先輩ならびに龍田、伊藤が付添ひに残り、後は皆んな思ひ／＼の滑走振りで御一行のスプールをたどる。午後四時吾々も下る。雪がふつて來た。吾々五人の他は誰もゐない。實に何んともいへない靜けさだ。一行に追いつくべく急ぐ、柔い羽毛の様な雪が音もなく降つてくる。

多人數が滑り去つた後の山の靜けさ、實に落着いた寂しさだ。ステムボーゲンで下り、夕日澤に入る。雪は音もなく盛んにふつてゐる。誰もゐないと思つてゐたのに、木の蔭から一人の男がさも嬉し氣に出て來る。とうしたのかと問へば一緒に來たものに、はぐれたの事、ではと云ふので一人一行がふえてどんどん澤を下る。冬の短い日はもう暮れて周りがかすかにわかる位。只専すらに道を急ぐ、丁度その頃雪も小降りになつて月が出た、星もキラ／＼と輝いてゐる。山の中で

見る星は實に奇麗だ。

針葉樹が長く眞白い雪の上に蔭を投げかけてゐる。皆んな沈黙の歩みを續ける。七時半頃白樺の林を通して赤いヒュツテの燈火が洩れてゐるのが見えた。あの中に宮様が今頃は楽しい今日の御語りひをなされて居られるのであらう。

吾々は四人で大島製材所の小屋へ向ふ。闇の中の明りに日の丸の旗が見える。なんともいへない感じがする。山の小屋の夜、皆んながほんとうに人間味を出して御互ひに談笑してゐる。眞中にはストーブが眞赤にもえてゐる。山の人は親切だ。色々と面倒を見てくれたのは實に有難かつた。野崎君ともう一人がラテルネをさけて、宮様が今日御折損になつた代りのスキーを錢函まで取りに出發する。

晝の疲れのために皆んなわけもなく眠る。ストーブは山小屋の人々の親切で眞赤に燃えてゐる。

外は天候が變つて大分吹雪いてゐるらしい。明日の雪の良くなる事を楽しみながら眠る。丁度九時。

廿六日朝、外は吹雪いてゐる。バラ／＼と戸にあたる雪の音は今日の雪質の良い事を教へてくれる。

一同は午前八時ヒュツテの前に集つて宮様の御出を待つ。やがて宮様には連日のスキー御旅行に御疲れの体も拜されず相變らずの朗かな御微笑をたゞへさせられ一同に御會釋を給はり、やがて本日の朝里嶽登山は吹雪をおかして遂行される事になつた。馬橋道を歩いて行く中に、途中雪中に穴を掘つて其の中に藎をかぶり頭にはいつばい雪をかぶつてゐる馬が寒さうにたゞづんでゐる。

途中は吹雪かれ通し、宮様には此の吹雪の中にめけずにあの偉大なる御体格にリュックを輕けに背負はせられ一歩／＼と確實な歩調で登らせらるゝ御様子を拜し、吾々も亦大いに刺激され勇氣を出して御一行の後より御供を申し上げた。

だん／＼登るにつれて吹雪もひどくなり、寒氣も加はつたが遂に我張つて一〇九七米迄登る。此の時益々吹雪がひどくなつたので遺憾ながら下る事に決定された。宮様にはスキー帽を眞深くおろされ、しつかりした御身拵らへは實に吾々をして御頼母し氣に感ぜさせられたのも恐れ多い事である。

やがて宮様の御一行は吹雪の中をステムボーゲンで下つて行かれる。我もすぐ其の後をつたふ。吹雪いては居るが雪が猛烈になり、やつと森林の所へ来て休む。皆んな眞白だ、宮様がすぐ下のスロープでこの吹雪にもお厭ひなく、雪を享樂遊ばされて居られた。高らかな、そして愉快さうな笑ひ聲が聞へる。きつと誰か痛快に轉んだらう。宮様にはスロープの上から急な直滑降を物の御見事に下らせられ、下で鮮かなストップを遊ばされる。吾々一同シーハイルを思はず叫ぶ。

残念ながら本日の登行は吹雪のために頂上を極められず、午前十時四十分ヒユツテに御歸り遊ばされた。途中宮様には恐れ多くもこの山の造材小屋へ御自ら御入りになり、造材の様子を御視察になられたのには吾々感激の他はなかつた。

一度吾々は昨日の小屋へ歸つて晝飯を食ふ。山の人々の心盡の味噌汁が寒さに冷へた吾々の身体を暖めてくれる。外は未だ吹雪いてゐる。

色々今日の登山、昨日の奥手稻の事について話が出る。あちらこちらに愉快な笑ひ聲が聞える。印象深い、このスキー旅行も今日で終りを告げるかと思ふと、總てが名残り惜しく懐かしくなる。

午後十二時四十分、盡きぬ名残りを惜しみながら、山の人々に別れを告げ、ヒユツテの前に宮様の御出發を待つ。

十二時四十五分位に、いよく宮様には、此の麗わしい靜かな白樺の林にかこまれたヒユツテを後に、錢函へと向はせらるる事になつた。吾々は道をつける爲めに三十分位先に出發す。澤傳ひに錢函の峠へ出る迄は皆んな名残りおしい話ばかりだ。途中小さな雲に埋もれた小屋があつた。誰かゞ之が有名な「ヘソ」の一夜を明かした所だと云ふ、一同大笑ひ。遙山の南スロープへ出る所で宮様の御一行が吾々に追ひつかれた。そこで兩側に道を開けて御送り申したが、吾々の前を御通りになる時大野スキー部部长が、之が有名な「ヘソ」ですと宮様に御教へ申した所、宮様には思はずそれに御笑ひなされたので吾々も引きこまれて大笑ひ、遂に常にかくされてゐる「ヘソ」も御目にとまつたと誰れかゞ言つて亦大笑ひ。

一同後から御供して行く。御一行は遙山の南スロープの猛烈な直滑降を成されるらしい。下から之を眺めてゐると、雪

は良し、スロープは急だし痛快々々。宮様には物凄いスピードで群を抜き真しぐらに下に降つて來られたが、ギャップでもあつたのか御勇敢に空に舞はせらる。その後には宮様の朗かな御笑ひが聞える。眞にスポーツマンライクな宮様の御態度には、いつか夏、横さんが札幌へ來られて講演をなされた時、「宮様は我々の言葉で申し上げるならば、本當に朗かなヤングゼントルマンであらせらる」といはれたが最の御事と拜察せらる。先輩木原さんも、もんどりうたれたので皆んないゝ所を見たと思ふまい事か。御一行はほとんどスコックの体、またも上つて行くのが見える。今度は宮様鮮かに御滑降遊ばされたのが見えた。皆んなシーハイルを叫ぶ。

吾々が見てゐると、御聲が、りりで皆んな直滑降をしるとの事、一同先程の皆んなの轉け振りを見てすこし尻込みする。それ「行け」と宮下が眞先に登る猛烈なスピード、やつと我張つてまづ轉けずに降る。上を見るといやごろ／＼ごろ／＼。宮様には一同の滑降してくるを御覽になつて下から大きな御聲で「我張れ／＼」と叫ばれてゐる。宮様がスポーツマンの標語たる「我張れ」と云ふ言葉を御知りになつてゐたので、皆んな喜ぶまい事か。後藤さんが最後にすべつて來られたが途中物の見事に台覽轉倒をやり、氣の毒にもスキーを折られたが、このスキーなるものが後藤さんの有名なる國寶スキーで時代物がなくなつた事は實に惜しい。宮様には御同情の御言葉をのこし、一足御先に峠へと御向ひ遊ばされた。我々はそので後藤さんのスキーを修繕して後から行く。峠へ出ると急に沙婆じみて來た。今までの思出深い旅行も此の峠を下ると共に終るかと思ふと實に名残り惜しい。馬橋道をステミングで下る。パン／＼に氷つてゐる制動をゆるめると物凄いスピードになる。左山のカーブで谷間へたゞき落される。やつと上りつめたと思つた頃、大兵宮下がこゝのカーブで同じ事をやつて上から落ちて來て二人重なつたまゝ、また谷へむけて落ちこんで行く。二人とも大悲鳴をあけて後から來た中野先輩に彌次られる。宮様にはとつくに御下り遊ばされたらしい。

急いで後を追ひ、ほとんど町近くで御一行に追ひつく。晴れた空に百姓屋にかゝけられた日章旗がほんとうに清々しく涙がこぼれる程うれしく感ぜらる。宮様には純な可愛らしい小學生の奉迎の中を日焼で眞黒くなられた御尊顔に笑みをた

へさせられ、いと御丁重に奉迎の人々に御會釋を給はりつゝ、錢函の驛に御入り遊ばされ、五時の汽車に御乗りになり札幌へ御歸りになつた。

我々も同じ汽車に乗り皆んな行く時よりも尙一層の黒さに光を増して、實に愉快な面もちだ。思ひ出の旅についての楽しい語らひに花を咲せ、先輩連中も若い者と一緒になつて、失敗談やまた御自慢に皆んなを笑はせる。

ほんとうに警備隊などの大任を負せられ心配してゐた旅行も、何んのつゝがもなく終りを告げた事は、ほんとうに嬉しく、之も宮様のスキー御堪能の御賜物と一同深く感激いたして止まない次第であつた。やがて汽車は札幌驛に着いた。吾々は外に堵列して御別れをつけた。札幌は暖いために道がとけてゐる。其の中を宮様の馬糞は鈴の音高く過ぎて行く。吾々はそのほがらかな鈴の音の聞えなくなる迄、感激のあまり、ほんやりと立つてゐた。そして御迎ひの群集の歸るざわめきに氣がつき、一同驛前に集り、今までの旅行の無事に終つた事と、宮様の御健康を祈る「シーハイル」を高らかに叫んだ。

青山温泉附近の思出

井 出 英 次

ほかくと暖い日を浴びながら、尺餘の雪の下から甦つて来る力強い春の喘きに耳を傾けてゐる時、私の頭に最も明かに浮んで来る事は御警備班の一員として、秩父宮殿下のスキー一行に御供し奉つた光榮ある青山温泉不老閣に於ける三日間の生活であります。

エウイルインの物語を想ひ起させる様な、珍らしく暗示的な雲は折からの夕陽に例へ様もない程美事な黄金色に映えて居りました。チセヌブリの畫く柔い曲線と、ニセコアンンの清楚な姿、マツカリヌブリの嚴めしい山影は、銀色と灰色それに黄金色の美しい階調の中に聳へて居りました。その様な美しい背景に飾られた昆布驛へ降り立たせられました殿下には恐れ多くも誠に粗末な馬橋へ御乗り遊ばされて、青山温泉へ向はせられました。御供の警備隊の人々は村外れからスキーを付けて従ひました。一つの比較的急な坂を登りつめると、そこからは緩い丘の起伏が青山温泉の谷まで續いてゐます。そしてその急な坂を登りつめた所が村外れで、分れる馬橋道と再び出會ふ地點になつて居るのです。我々が其處まで登つた時、空の黄金色は橙色に變つて居りました。その時誰れやらの指さしたマツカリヌブリの姿に私達一同の視線が集まりました。それから人々の目は期せずしてニセコアンヌブリ、イワオ、チセと美しい山々の姿に見入るのでした。チセのなだらかな山稜に續く橙色の空に視線が向けられて、奇異な雲をそれからそれと追つて行く中に不圖御召しの馬橋が停つてゐる。

るのに氣付きました。そこから殿下にはスキーを御召しになられたのでした。御無理かと拜察される様な殿下の御日程を考へ奉る時、今更ながら、その御元氣に驚歎するのではありません。殿下に従ひ奉る一列の長いスキー隊が軽い登りと、小さな滑降を何度も繰り返して、左手の方に屏風を立てた様に連つて居る高地の下を辿つて居る時には、既に暮れ易い北國の空は半月が中天に淡い光を放つて居りました。

屏風形の高地が急に落ち込んでニセコアンベツ川に臨むその谷の底に青山温泉があるのです。青山温泉に着いた時は御出迎への高張提灯が明るい光を誇る暗さになつて居りました。部屋割當やら食事の騒々しい時間が過ぎて、各々その定められた部屋へ五人、六人、十人と落着いてからも光榮に感激した人々の胸からは種々の歌が湧き出しまして賑かさを通り越して少々騒々しい程でした。隣室の新聞記者諸君はさぞ御迷惑でしたせう。此處で御詫びをして置きます。翌三月二日の御旅程であるニセコアンベツ御登山に思ひをめぐらしながら就寝したのは十時半頃でした。私は今冬一週間の合宿中二度ニセコへの登攀を試みましたが、二度とも追降されました。此の山は附近の最高峯で八百米近邊で全く白樺の樹林がづきて、それ以上は純白な秀麗な姿の山です。それ故少しの吹雪でも八百米以上の登攀は相當に困難な山なのです。しかし恵れた天候と雪質に於て、此の山の頂を極められた人々は必ずその雄大な眺望と、思ふが儘のグレンデに満悦されるでせう。そして不快な抵抗を少しも齎らさない軽い粉雪と、その絶好な角度による滑降の三味境はスキーをばく度毎に思ひ出されるでせう。

濃いガスが山々の姿を半分から上をすつかり包んでゐる二日の午前八時、殿下には假御宿泊所不老閣温泉を御出發、ニセコアンベツの登攀に向はせられたのであります。御供の一行は前日の三倍程の長さでした。ニセコの南へ緩く突き出たテレスの上で、アザラシを着けた一行は、その樹齡を誇る様に又古の怪異を物語る様な白樺の老木の間を、鈍角をした登高の跡を残しながら一時間程辿つて行きました。登るに従つて白樺の林はスラリとした若木に變り、ガスが私達を取囲みました。そして樹林帯を抜ける頃には人々の姿が灰色のガスで夢の様にほんやりとしてきたのです。それから的一步／＼

は益々私達を濃霧の中に導き入れ、遂には自分のすぐ前の人が灰色の影の様になり、その前の人の一步の進出はその姿の抹殺でした。その頃より加つて来た寒氣と烈風の爲めに約一〇五〇米の邊りより引返しました。氣温低下の爲めにガスが眉毛や頭髮等に氷付いて、霧の中からポツカリと浮き出して来る様に、始めはほんやりと、距離の近づくに従つて明かに見え始める人々の顔が皆んな申し合せた様に、玉手箱を開いた浦島太郎の様に見えたのです。強風による寒氣を早く避ける爲めにアザラシをつけた儘で樹林帯まで降りました。そこでアザラシを取り、軽い氣分の滑降に移りました。老木と若木の入り混ちる地點で晝食を攝り、私達のスキーの搖籃の地である所謂藻岩山の南麓スロープに着いたのです。そして殿下にはそのスロープで開かれた地方部落の少年少女のスキー競技を御台覽あらせられました。少年達の直滑降競争、ジャンプ競技等、次ぎくゝと行はれた勇ましい無邪氣なレース振りは次の時代の本邦スキー界を祝福する叫聲の様でした。此等の姿を前にして本邦スキー界が如何に今度歸朝する選手諸兄の土産により培れ、如何に展開されて行くかといふ事を思ふ時私達は明るい微笑みを禁じ得ないのであります。

競技會御台覽後再び御供の一行は長い行列を作つて藻岩山の御登頂に従ひました。

藻岩山の滑降は悪い雪質にもかゝわらず比較的面白いものでした。頂きから東に向つて長い直滑降のスプールを残してそれから右に少し回いて出る振子澤の下りは當日の一番軽快な滑走だつたでせう。U字形をした此の澤の一方の側から斜の滑走より得る運動のエネルギーは私達の身体を反對の側の斜面、殆んど尾根まで押し上げるのでした。そこで方向を換へると同じ様な運動を振子の様にくりかへす事が出来るから此の澤はこんな結構な名を頂戴したのでせう。

三月三日の御旅程はチセヌブリ御登攀でした。この日の早朝暴風雪警報がもたらされました。近來稀な猛烈の暴風雪が來るとの事でありました。けれども此の御登攀は御決行されました。此の日の單調な、そして展望のない馬場温泉までの道歩きを盡した頃、ひどく濕氣を含んだ雪が降り始めました。チセヌブリへの登攀を始める頃になると雪は一段と烈しく山々は物凄い山鳴りで、暴の襲來を前觸れして居りました。チセヌブリの七百六七十米邊で一行がしばらく休んで居る中

に急に強風が襲ひ始めまして、濕氣を含んだ雪を横なぐりに打付けて、目を見開いて居るのが困難な様な天候になりました。それで其處から早やアザラシを取り滑降に移つたのです。馬場温泉に御着きになつたのは午前十一時三十分でした。そこでパーティーの歩調を揃へる爲と殿下の御思ひやり深い御心により大部分の警備隊の人達や新聞記者諸君は先に青山温泉へ歸る様にとの事になりました。

眞實に豫報通りの大吹雪でした。山を下り始めてから少しの絶え間もなく、風力と降雪は一層加はつて荒れ廻りました。風速は二十五米とか、一寸でも油断すると吹き倒されてしまふのです。若し此の様な大吹雪に眞冬のきびしい寒氣の中で出會つたなら人々の身体の凸出部は總てひどい凍傷をまぬがれなかつたでせう。強風と吹雪の凄壯な暗灰色の中に私達の視界は一問四方に限られてしまつたのです。暗い狭い此の限られた視界も投げ付ける様に眼の中へ入つて來る濕雪の爲に誠に心本ないものでありました。此の様な大吹雪の中に於ける沈痛な御供の心は殿下の終始いと御沈着な御行動と朗らかな御態度によつて力付けられたのは誠に恐れ多く感激の他はありませんでした。

殿下の御一行に先立つて馬場温泉を先發した人々の中には、始めて此の様な吹雪をストーブなしに経験する人や、スキーにあらずスケートの名人や、生れてから三度しかスキーを付けた事のないといふ様な人達が澤山居りましたのです。それ等の人達の心が此の吹雪の中でひどく動搖し、沈着性を幾分失なつたといふ事は誠にあらゆる點より考へて無理からぬ事と思はれます。従つて此の一行の殿りと先導の苦心は非常なものでしたでせう。此の雑多人々より成立つてゐる一行の中の經驗の浅い人々の口からは段々不安の叫びや、錯覺的の考へが述べられる様になりました。此の様な事は山地に於ては最も危険な無益な事なのです。一同の意氣を沮喪する有害なつゝしむべき事ではありますが、それに對する非難等はその時の環境とその人達の經驗とを考へて見ると思ひも及ばない事です。

不安と困難が大きかつただけに、青山温泉へ到着した時の一行の歡喜は一つの劇的シーンでありました。

今にして殿下御退道後にその人達によつて放たれたであらうと思はれる様な北大に對する下劣な批難と、此の場の光景

や、手稻、奥手稻の山々に於ける種々な出来事を思ひ合せて見ると皮肉な苦笑を禁じ得ないのであります。

私達が青山温泉へ着いてから、一時間後に殿下の御一行は無事御到着になりました。

此の日の夜は私達に取つて終生忘れる事の出来ない光榮の夜でした。御出發前の殿下には恐れ多くも私達を御召しになつて優握な御言葉で賜はつたのでした。光榮に感激した若人の眼には必ず御言葉にそひ奉るといふ固い決心の色が溢れてゐました。種々な用事を帯びた人や、差迫つた試験に直面した私達は吹雪の荒れ狂ふ夜を歸札の爲勇壯な覺悟で殿下御出發の三十分程前にスキーを付けて昆布驛に向ひました。晝間の吹雪とそれに加はる夜の寒氣とを考察致しまして、嚴重な且つ念入りの服装で出發しました。しかし我々の豫想は美事に裏切られ、嵐の後の斷雲が時々鋭い月影をさえぎり段々と夜の暗さになれて行く私達の目の前には月光に明滅する心良い神祕的な滑降路が続くのであります。

影繪の中からぬけ出して來た様な數箇の人影は更に淡い細長い影を右手の方に引づりながら、心地よい滑走を續けるのでした。荒れ廻つた濕雪が夜の寒氣に引きしまつて全く思ひも設けなかつた良質の雪に變つて居りました。

所々に吹溜りがありましたが、それ等も良好な滑りの爲に何んの苦勞にもなりませんでした。

途中で消防隊のいかめしい身装りの一隊に出會ひまして、何んか私等は突然アラビアンナイトの物語りの中へ跳り込んだ様な氣分が致しました。村外れから驛頭までは澤山な部落民が整列して殿下の到着を御待ち申上げてゐました。

昆布驛前ですゝつた熱い番茶の香りに始めて我々は夢幻境から現實の世界へ誘ひ出されました。

それ程青山より昆布までの道は祝福されたものでした。それから約一時間の後私達は恐れ多くも誠に御粗末な御召しの馬橋を昆布驛頭に御迎へしたのであります。明日は最早御退道遊ばされる殿下を昆布驛頭に御見送り申上げた時は、誠に萬感胸に迫り唯々感泣の他はありませんでした。

この様にして終りを終けた光榮ある三日間の生活は、春暖い今日最も力強く、そして楽しい追憶となつて思ひ出されるのであります。(三・三・二二)

登山史上の人々 (前承)

大 島 亮 吉

近代科學的登山の鼻祖ソッスニール

扱て此處に於て筆者は既に屢々其引用に依りて讀者の知れる所ならんと思惟するソッスニールの大著『Voyages dans les Alpes』に就て尠しく左に述ぶる事としよう。ソッスニールは彼れが『l'Academie de Genève』に於ての『Professeur de Philosophie』の教職に在りし時より該教授を休職後に於ての一千七百七十九年より一千七百九十六年の十七年間に其の偉著を完成したのであつた。然して其の第一卷の初めて世に出でしは一千七百七十九年に於て時にソッスニール、年壯齡三十九、當時既にアカデミー・ドゥ・ジュネーヴの哲學教授として其名聲を瑞西の一般社會に博しつゝありしソッスニールは、此著書の上梓完成と共に、當代第一流の科學者たるの承認を得たのである。而して又此著に依りてソッスニールの名は燦然として登山史上に輝きて、永久不滅と成つたのである。同著は全四卷より成る浩瀚なる大著にして、其の第一卷は小型四ツ折版 (Petit in Quarto) 四百五十頁と成りて一千七百七十九年ニュウシャールテルの書肆 Louis Fauche-Borel より出版せられて世に出でた。而して同著第二卷以下は全く第一卷と同型にて、第二卷は一千七百八十六年ジュネーヴの某書肆より、第三卷並に第四卷は共に一千七百九十六年第一卷と同じくニュウシャールテルの書肆ルイ・フォーシユ・ボーレルより出版せられた。而して更に同著の第一卷と第二卷のみは一千八百三年に第一卷を、其翌一千八百四年に第二卷を全く第一版と同型に於て前

記ニユウシャーテルの書肆ルイ・フォーシユ・ボーレルが再刻したのである。先輩横有恒氏の秘蔵に係りて、筆者の爲め文献資料として幸ひにも繙讀を許されしソッスニールの同著オリジナル版と謂ふは、其全冊第四卷の中、第一卷、第二卷は前述の一千八百三年及び一千八百四年の再刻版なるが、第三卷、第四卷は共に一千七百九十六年版の真にオリジナルのものにして、共に登山に關する舊時の著書文献中の稀觀書と謂ふ可きものである。同書は羊皮背皮、紙質は十八世紀以前の諸古書に特有なる純日本紙の如き紙質のものにて、木彫活字木版挿畫の稚拙なれど、又典雅莊重の趣に富みて甚だ古典的香味豊かなるものにして、斯る十八世紀後代の古書に依りて近世科學的登山の鼻祖たるソッスニールの著書を繙讀し得たるは筆者の歡喜に堪えざる所である。元來ソッスニールの該著の表題は通常 'Voyages dans les Alpes' とのみ記されてあるも右は簡略せられし書題にて、正しくは 'Voyages dans les Alpes, Précédés d'un Essai sur l'Histoire Naturelle des Environs de Genève.' と謂ふ長き表題である。左に試みに同著第一卷（一千八百一三年重刻板）の表題頁を移記せば其は左の如くである。

VOYAGES

DANS LES ALPES.

PRÉCÉDÉS D'UN ESSAI

SUR L'HISTOIRE NATURELLE

DES ENVIRONS

DE GENÈVE.

Par Horace-Bénédict de Saussure, Professeur de Philosophie en

l'Académie de Genève, etc.

TOME PREMIER.

Nec Species sua cuique manet, remanque novatrix,

Ex aliis aliis reparat Natura figuras. Ovid.

A NEUCHÂTEL, en Suisse,

Chez Louis Fauche-Borel, Libraire, et Imprimeur du Roi,

rue de l'hôtel-de-ville.

MDCCCLIV.

而して第二巻表題頁も又第一巻の其れと重要な差異なきも、第三巻以後の表題頁著者の肩書には新たに Horace-Benedict de Saussure, Professeur émérite de Philosophie dans l'Académie de Genève, et membre de plusieurs autres Académies. と書き代えられてある。是れに依りて勿論ソッスニールが第三巻以後の著を成せし時には既にアカデミー・ド・ジュネーヴの教授の職を休職中なりし事を吾人は知るを得るのである。

此著第一巻は該著の表題の一部(副題)と成り居る所謂 'Essai sur l'Histoire Naturelle des Environs de Genève' が其巻の大半を占めて、其れのみにて廿章二百九十四頁を成して居る。而して五頁より成る簡潔なる彼れの自叙傳とも謂ふ可き 'Discours Préliminaire' が其に先立ちて附してある。其以下は愈々本題なる 'Voyages dans les Alpes' に移るものにて同巻に於ては 'Voyages autour du Mont-Blanc' は全五十四章に亘る中の十二章を收め、第二巻五百六十六頁全巻は其以下の諸章を包有してゐるのである。古典的なる稚拙味に富む描法の挿畫、幼稚なる描法の展望圖、地圖數十葉を以つて修飾せられて居る。而して第三巻五百三十二頁並に第四巻五百九十四頁の兩巻全部はソッスニールが第二回より第七回迄に亘るアルプス旅行の記述悉皆の収録に宛てられあるものである。

上掲の 'Voyages dans les Alpes' の初版本以外に此著には數多の重刻本、改型本が出版されて居る。就中有名なるは一千七百八十年より一千七百九十六年の間に出版せられたるハツ折版 (Octavo edition) 全八巻と成りてニウシャーテルに於て重刻せられたるものである。此のハツ折版にも又各種ある如く、未だ其の總べてに亘りての正確なる事は彼の古典的登山文献に關しての權威クリーヂ (W. A. B. Coolidge) さへも充分に解明し居らぬと自記して居る。乍然クリーヂの所藏せる該ハツ折版は初版四ツ折版と内容は勿論挿畫、地圖も全く同じく、唯だ僅かに表紙飾 (Vignette) と或る章の初頭飾文字とが相異して居るのみだと謂ふ事にて、同版は又初版四ツ折版に次ぐ可き稀觀書とせられて居る。(Coolidge, Swiss Travel and Swiss Guide-Books, 1889, p. 181, 174, 175.) 尙ほ又 'Voyages' 中の 'Partie Pittoresque' と稱す可き部分は、是を抄出し、題して 'Voyages dans les Alpes, Partie Pittoresque des Ouvrages de H. B. de Saussure' (12mo, pp. XXVII +

96 Genevaet Paris, 1824. with an introduction by A. Snyous) と爲して巴里にて數種の版と成りて一千八百三十四年より一千八百八十年の間に再刻せられて居ると謂ふ。(Coolidge, op. cit. p. 131.) 乍然以上の古版を愛して、故意に其等の稀書を求むるの要無き愛書家以外の一般讀者、又は一般的の登山文獻蒐集者に取りては、巴里の書肆 Libraire Fischbacher (33, rue de seine, paris) より出版せられて居る同じくソッスニール一家の人なる M. B. de Saussure の編纂に係る増訂十六折版 (6e édition, 1920. un volume in-16) 一卷を以つて其書を知る上に於ては充分満足し得ることと思ふ。而して尙其上に同版は却つて初版には包有せられざりし初版上梓以後のソッスニールのヴァレへの旅行記、モン・セルヴァン、モン・ローズズの山麓を編歴せる科學研究旅行記を悉皆含有するを以て、又一層彼れの登山經歷に關しての研究者一般讀者には利便である。

ソッスニールの爲せしアルプスに對する旅行の總べてを此處に記する事は到底紙幅寡少の故を以て適はぬ。筆者は彼の登山經歷の中最も重要にして、又近代の登山の黎明期の端緒を爲す彼のモン・ブロン初登頂に關する部分を特に尠しく詳述し、他は簡略に記するに止める事とする。而してソッスニールの小傳又其れを以つて事足れりと筆者は些か思惟する者である。

凡そソッスニールの爲せし前後七回に亘るアルプス旅行をフレッシュフィールドに依りて年代記的順序を離れて場所的に大別する時は、ビエヒ (Buet) モン・ブロン、コルド・ド・ヂェアン、モンテ・ローザの四部と成る。(Freshfield, op. cit., chap. VI, VII, IX, X.) 而してビエヒの登頂に關する歴史はモン・ブロンの初登頂の序幕を形成するものであり、且つサボアに於ける登山史の最初のものとして爲すを得るものである。ビエヒの登頂には固よりソッスニールの活躍も關係ありしが、此時顯はれた登山史上の重要人物には彼のジャン・アンドレ・ドゥルネック (Jean André Darné) とマルク・テオドール・ブッリイ (Marc Theodore Bonrit 1739-1819) とがある。ブッリイは後年モン・ブロン登頂に關しても重要な役割を演じ、彼こそはアルプスに對して絶對的に純眞な好愛を示した最初の人で有つたのである。ブッリイに關して稍々此を精叙する事も決してソッスニ

ルの傳記中には無益では無いと筆者は信するが、然し又斯かる小傳に於ては紙面の僅少を以て其を割愛するは止むを得ない。唯だ筆者は彼が畫家にして、主としてサヴォアの氷河を訪れて其を描き、又彼の描畫の一部はソッスニールの大著を飾り居り、且つ彼には *Description des Glacieres, Glaciers et Amas de Glace du Duché de Savoie*. 1773. Geneva, Bro. English translation by C. and F. Davy, Norwich, 1775, and second edition, 1776; a third at Dublin in 1776 の著書ありて、ソッスニールの登山友達であり、モン・ブロンンの初登頂に關してはバルマアとバックルの争ひに加つて少しく中傷的行爲があつたと謂ふ事を記するのみにて彼に就ての筆は此處に暫く擱く事とする。(Freshfield, op. cit., chap. VII pp. 181-187.) 而して次にモン・ブロンンの初登頂に關してのバルマアとバックル其他及びソッスニールの活躍に移らうと思ふ。

凡そ登山史上一山岳の初登頂に關して多くの登山史家の常に濃彩を點じて其を精叙する所のものは此の一千七百八十六年八月八日に於けるアルプスの帝座モン・ブロンンの初登頂と一千八百六十五年七月十四日に於けるマッターホルンの初登頂の其れとであらう。乍然此二峯の登頂は將に登山史上に於て重大なる意義あるが故に斯く重要視されて細叙せられ、又同時に一般的にも知悉せられて居るのである。既に再述する迄も無く前者モン・ブロンンの登頂は近代的登山の開幕の重大なる端緒を爲して、アルプスの峯頂が其後漸次登頂征服せらるる大なる起因を作つたと言ふ事に於て實に重大なる出來事である。而して後者マッターホルンの初登頂には前者モン・ブロンンの初登頂に始まりたるアルプスの峯頂征服の略ぼ終局を爲す重大なる意義が存するのは此處に敢へて言ふ迄も無い事であつて、モン・ブロンンの初登頂にはソッスニールよりも寧ろ一般的にはジャック・バルマア(Jaques Balmat)が結び付いて名高いアレクサンドル・ド・ブエー(Alexandre Dumas, pere)のアルプスの古き浪漫的冒險物語が人々の心胸に浸みて居るし、マッターホルンに於てはアルプス峯頂征服の勇者ウィンバーと同峯との争鬪の湧血的にして又興味深き物語が汎く人口に膾炙して居る。其故マッターホルン初登頂の其れと共にモン・ブロン初登頂に關する文獻記録は此又頗る多いのである。乍然筆者は勿論此處に於てはフレッシュフィールドの正確を期する學究的な記述に従つて次に其を叙せんとする者である。

既に右述せしが如く、ソッスニールは一千七百六十年に於てシヤモニイ谿谷の各村にモン・ブロンの絶頂を最初に登りたる者には多額の報酬を與へ、又其の爲めに時日を費せし開路者にも相當の代償を支拂ふ事の保證を爲せし揭示を爲した。而して其時以後十五年間は彼の提供せし賞金を得んとしては如何なる特記す可き努力も拂はれずしに經過したのであつた。ソッスニールの一千七百六十年に於ける案内者たりしビエール・シモン(Pierre Simon)がモン・ブロンに對してタキユル側とシヤモニイ側から登山せんと試み爲せし事は眞實であるが、其の何れの場合に於ても彼は最初に遭遇せし困難を突破する事は出来なかつたのであつた。元來シヤモニイの谿谷の者は水晶採取や羚羊狩の爲めに峯稜や氷河の危険を冒す事には慣れし者共であつた。然るに此のモン・ブロン登頂に關して獨り冒險心の甚だ欠除して居るの原因は何處に存したかと謂ふに、其は恐らく二個の理由から成つて居るのであらうとフレッシュフィールドは誌して居る。即ち其の一は此の「偉大なる雪白き山岳」が不可登であると謂ふ彼等山麓の住民の心胸の深奥に根ざしたる信念の精神的影響にして、次ぎに残れる第二の理由としては該峯登頂を企てし際には如何なる危険に遭遇するや測り難く全然其れが未知であると謂ふ事である。殊にシヤモニイ谿谷の住民は瑞西のツェルマツトやヴァル・デラン(Val de Hérens)の住民等とは異なりて其日常生活の中に於ても、氷河を渡る峠を越ゆるの必要が無いと謂ふ事も其點と關聯して考慮の中に入れられねばならない。シヤモニイ谿谷の住民は伊太利亞へ赴くのは常にモン・ブロンの山麓を迂回して行くのである。其故従つて彼等は氷上にてロープを使用する事を知るのにも瑞西ヴァレ州の住民より甚だしく遅れて居たのであつた。サヴォアに於けるアルプスの峯頂探究が決定的な進歩を見たのは、其故十八世紀の後半では無いのである。約一千七百七十年頃より是迄氷河を訪ねる旅行者は極めて稀有であつたのが、急激に増加し、其が爲めシヤモニイ谿谷の住民は其案内者として比較的好き報酬の下に雇はる者が多く爲つた。而して今や彼等の中には、單なる山麓の氷河以上の高きに迄案内する事が出来たならばより以上の報酬が得られるであらうと謂ふ企劃を抱き、此處に於てモン・ブロンの登頂が漸く眞實に彼等の間に問題となつたのであつた。一千七百七十五年に其企劃の第一が行はれて、四人の案内者がグラシエ・ボソン(Girard des Bossons)の下半

部とグラシエ・ドック・タコンナ (Glacier de Taconnaz) とを分つ山稜たるモンターニエ・ドック・ラ・ロート (Montagne de la Côte) に依りてモン・ブロンに登らんと爲した。而して該登山隊はグラン・ミユレ (Grand Mulets) の高距迄氷河を登つた。乍然該地點に於て彼等は、足場地形の險惡なるが故には非ずして、寧ろ疲勞と山暈の爲めに前進を止めて仕舞つた。彼等の失敗の原因は全く窒息するが如き雪面上は暑熱と食慾の全然欠除して仕舞つた事だと謂ふ事であつた。此は然し寧ろ身体的の原因に依りしものに非ずして、精神的の素因を有するものであらうとはフレッシュフィールドの誌す所である。兎に角此結果は其時以後八ヶ年間再び登山を試みる企劃を全く爲さしめざりし程に深甚にシャモニー谿谷の冒險心に富みし者共の勇氣を挫いて仕舞つたものであつた。

一千七百八十三年にシャモニー住民 (Olanonians) の一隊が又一千七百七十五年の登山と同じ登路より登山して、同じ結果を齎らして歸つて來た。然し彼等は一千七百七十五年の時よりは約二千呎程より高く登つた。即ち「小モン・ブロン」(Dome du Goiter) の岩が冠座して居る氷の拱門の下なるプッティ・プラトー (Petit Plateau) 迄達したのであつた。其地點にてバァティの一人が病氣と爲りし爲め、彼等は止む無く其れ以上の登山を中止したのであつた。同バァティの最も勇猛なる案内者、揮名をル・グラン・ジョラス (Le Grand Jorasse) と呼ばれ居りしロンバル (Lombard) は其後、ソッスニールに語りて、再びモン・ブロンの登山を試みる爲めに招かれる事あらば、食料等は携行せず、唯だ日除傘と氣附藥 (Eau Benzoin) の瓶を携え行かん、と曰ひしとソッスニール自身は彼の著の中に誌して居る。(Voyage, p. 1104.)

扱てモン・ブロン登山の歴史に於て次に顯れ來たりし者は、既に前述せし彼のプッティである。彼はソッスニールの許諾を得、彼の經濟的援助を享けてモン・ブロン登頂を、ソッスニールよりも、より熱心に試みて居た者であつた。彼は熱心家である。此點に於てのみ彼は後代の登山者より尊敬せられて居るのである。彼には何等科學的探究の目的も興味も無かつた。彼は唯だ一つの目的を有して居た。其はモン・ロブンの絶頂に立ちたいと言ふ事であつた。一千七百八十年に彼は彼の多年の畫作に依る製作品を携へて巴里に赴き、可成りの名聲を得て來た。而して佛王より賞金を與へられたので、

是迄ソッスニールから得た經濟上の援助も要せず、又其に依りて爾後數年の登山の費用も何等他に求むるの煩も無くなつたので、一層モン・ブロン登頂に對する熱心さを抱いてシャモニーに歸つて來たのであつた。而して彼は案内者にモン・ブロン不可登で無い事を熱心に説いて、一千七百八十三年の初秋、同夏案内者等の試みしと同じ登路に依りて登山を企てた。パアティはモンターニ・ドゥ・ラ・コートMontagne de la Côteの露營地に寝たが、不幸にして其翌日天候は不良と爲つたので止む無く引き歸す事に爲つた。

此處に、又モン・ブロンMont Blancの登山年代記に於て初めて新人物が登場する事に成つた。彼は實に同年代記に於ては主要人物の一人である。即ち其はミッシェル・ガブリエル・バックル(Michel Gabriel Paccard)である。彼はプッリイの此の一千七百八十三年の登山のパアティに加はつた一人である。而して後モン・ブロンを最初に登頂せし最も大なる名譽を荷擔ふ可き一人であるのである。バックルはシャモニーに於ける公證人の子息にて、科學的な教育を受けたる立派な人物であつた。バックル家は、シャモニーに於てはデヴァアスウ家(Devosson)と、バルマア家と共に主なる一の氏族を形造つて居るものである。(其故例へばソッスニールと共にモン・ブロンを登つたシャモニーの案内者の中五人はテウアアスウの氏で、四人はバルマアの氏が附く者であつた。筆者註) ミッシェル・ガブリエルはシャモニーを出でて伊太利亞・ピエモンテの名都トリノ大學に教育を受け、其處に於て醫學の學位を得、而る後巴里へ更に勉學の爲めに赴いた。巴里に於て彼は又其他に青年時代を送りつゝ在りしプッリイと相知り、屢々共に一夕を楽しく過せし事が在つた。斯くて巴里遊學を終えしミッシェルは故郷なるシャモニーの谿谷に歸り、醫師として世に立つ事とした。彼には科學に對する趣味が有り、植物學に就て勉學する所あつた。又彼は旅行の間地質學的覺書を誌したり、ソッスニールに頼みて測高器を得たり、又當時の科學専門雜誌 *Journal de Physique* にも寄稿した。今や彼は將に壯年時代にして、山岳旅行を爲す趣味を解したのであつた。プッリイと共に登山を企てし翌年、彼はモン・ブロンに近づく爲めに二回の重要な企劃を敢行した。然し兩回共失敗した。其結果として彼の決心は愈々固く成つたのであつた。此時の同行者はビニール・バルマアであつた。一千七百八十四年八月末にソッスニールとバックルとは親しく

相會ふ機會を得た。ソッスニールはバツカルを評して記するに「教養あり、植物に興味を有して高山植物園を自ら作つて居り、モン・ブロンに登頂せんとの望みを有せる『Jaligason』(立派な青年)である」と爲して居る。

此間一千七百八十四年九月に前述せしブウリイのモン・ブロンに對する重大な登山も試みられ、ブウリイこそは登り得ざりしも彼の伴ひたる案内者はエギュー・デュ・グーテ(Aiguille du Goutte)に登り、ドームを越え、現今Yallob氏の觀測所(一四三一二呎)の建てるボッセの下なる岩迄到達したのであつた。之は大なる成功であつた。モン・ブロンの山腹以下の障害は全く此れに依りて打ち敗られた事に成るのである。唯だ残るは頂上に到る最後の障壁の一千三百六十呎である。此處に於てソッスニールは一千七百八十五年たる其翌年の夏モン・ブロンの登頂を企てしが同年の變調なりし天候の爲め其機を失ひ、九月半ばに到りてブウリイ父子と共に登山を成し、エギュー・デュ・グーテの六百呎程下迄達せしも、大人數の欠點と新雪の深かりし爲め止む無く登山を中止し、種々なる觀測を爲すのみに止めざるを得なかつた。

此の時に於てモン・ブロンのドラマのもう一人の主要人物たりし者が舞台に出場したのであつた。其れが彼のジャック・バルマア(Jacques Balmat)であつた。バルマアはグラシエ・ド・ボッソン(Glacier des Bossons)の近くに一つの小屋を所有して居た當時廿四歳に成る青年であつた。彼は明日にル・プリウレ(La Pierre)と云ふ彼の居た小村の人々からは好くは謂はれて居なかつた。其の小村の住民は何時もモン・ブロン登山に際しては案内者を務めるのであつた。ジャック・バルマアが村の者から悪く謂はれるのも理由が有つての事である。彼は前述せし一千七百八十三年夏モンターニエ・ドック・ラ・コートラ・コートの山稜よりモン・ブロンの登頂を試みしシャモニーの案内者のみの隙に無斷で許しも無く加入したのであつた。其故彼は其の時一種の侵入者の如く其仲間から目されて居た。然も其時の歸途彼はグラン・プラトウの近くに於て水晶を探しに行くに欺いて彼等他の案内者と別れた。而して大膽にも雪中に一夜を明かし、其翌朝單身又再び前日の足痕を辿り登つて頂上より僅かに三千五百呎下の地點迄達して、漸く頂上に到達し得可き登路を見究めた事に満足して無事谿谷へ迄降りて來たのであつた。斯くてバルマアは彼が見出した登路を秘かにソッスニールに知らせて、最も多くの賞金を得ん

ものと考へて居た。乍然事態は彼に其の様な行動は探らせなかつた。即ちバルマアの考へしが如く、ブライとソッスールとはモン・ブロンに登頂を争つて居る者では無いと謂ふ事が解り、従つて秘密にソッスールにモン・ブロン登頂の登路を教へても大した賞金を得られぬと謂ふ事と、其れよりもバルマアの住むシャモニイに熱心なる、生來の登山者が居て秘密にして居ると其の登路は其の者に先を越されるかも知れぬと謂ふ事の此の二つが其の事態であつた。後者は勿論バックカルの事である。爰に於てバルマアはバックカルを巧みに利用しようとしたのであつた。即ちバルマアの目的は唯だモン・ブロンに絶頂に達せんとするに非ずして、ソッスールよりモン・ブロン登頂の結果として賞金を得んと云ふに在つた。其れにはモン・ブロンに登つたと云ふ證據が必要である。其證人と爲さしむ可くバックカルを彼は利用せんとしたのであつた。バックカルは既に以前よりモン・ブロンに登らんと熱心に努力して居る事を知り、彼は又決して賞金の分前を要求するが如き事無き立派な人物であると看取した。バルマアは直ちにバックカルと話し合ひ共に登山を爲さんとした。乍然天候不良の爲め三週間も彼等の出發は遅れたが、漸く一七八六年八月七日バルマアとバックカルは別々に隘谷を忍び出で、モンターニョ・ド・ラ・コートの頂上なる常例の露營地に登つた。然して其翌日の午後六時廿五分に彼等は露營地より十四時間半の登行を續けて共にモン・ブロンに絶頂に立つたのであつた。斯くして偉大なるアルプス最高頂征服は成就されたのである。

此のモン・ブロン初登頂の際バルマアは村人で彼の友人なる者に對して出發に際して彼等の登山中特に雪面に表れたる後頂上に達する迄の彼等の姿を見よと言ひつけて登山したのであつた。其故彼等の登山は直ちに山麓の村人の間に傳はり、従つて全村を擧げて此の兩人の登山を熱心に山麓より望見したのであつた。爰に一言誌す可き事は此の登山中バルマアの幼児は死んだのであつた。而してバルマアは始めて登山後に此の悲報を受けたのであつた。此の事は今日迄モン・ブロンとバルマアの記録の中に洩れて居たが、フレッシュフィールドに依りてル・ブリユレの村の古き記録簿より發見せられたのであつた。

バルマアとバックカルの登山を山麓より眺めて居た人々の中に幸ひにも丁度其際シャモニイに滞在せし科學者として知ら

れた獨この旅行家バロン・ドゥ・ゲルスドルフ (Baron de Tenzdorf) が居た。シャモニー其他の谿谷から多くの人々は普通の小きな望遠鏡で眺めて居たに過ぎなかつたが、ゲルスドルフは良好な色消レンズの望遠鏡で眺めて居たので、其の登山者が誰れかと謂ふ事をも見究める事が出来た。而して其に依つて彼は該登山者の採りたる登路と時間を詳細に描き入れたスケッチと覺書を作つた。此の覺書は極く最近に公表された。而して彼のバルマアとバツカルとの争ひに對しての最も確定的な證左として有名な瑞西登山界の耆宿ハインリッヒ・デュビー博士の考證 "Pitcairn wider Balmat" (Berne, 1913) に載せられたのであつた。此處に於てバルマアとバツカルのモン・ブロン初登頂に關する争ひに就て記する要がある。

バルマアとバツカルとのモン・ブロン初登頂に關しての問題とは當時に於ける彼等相互の問題たりしのみでは無く、又其れより後代の問題でもある。と謂ふのはバルマアは既に前述せし如く勇氣とか大膽さは充分有して居たが、決して清純なる人格の所有者では無かつた。而して登山後彼は身自ら一人でモン・ブロン初登頂の英雄たらんとして、バツカルは疲勞と雪盲と凍傷の爲め頂上に達せず、彼一人が最初に頂上に達したと聲明したのであつた。而して此事がより大なる範圍に亘つて流布したのは、彼の大アレクザドル・デューマが千八百三十二年シャモニーを訪れて當時は既に登山案内者中の老功者としてシャモニー谿谷に鳴り響いた大人物と成り居れるバルマアと會談して、彼の追懷談としてのモン・ブロン初登頂の冒險談を又小説家一流の魅力ある描寫と筆力を加へて、其著 "Impressions de Voyages" の中に書き、バルマアとモン・ブロンを不朽のものと爲したからであつた。洵にアルプスの帝座モン・ブロンを最初に登り究めし勇ましき老案内者が葡萄酒の罈を盛んに空にしつゝ意氣熾んに往時の勇ましき冒險談を物語るを感激しつゝ巨細に聽き取り、己の筆にて如實に書き移した其物語は讀物としての價値は充分であらう。又老案内者が己の生涯での最大の瞬間を回顧して物語つたものが多くの虚構粉飾を免れなかつた事實も看過する事は出来やう。而し其は何等モン・ブロン of 真正なる登山の歴史に關しては益する事無きのみか、却つて一の重大なる事實を犠牲として作られた物語なのである。即ち其は真正のモン・ブロン of 歴史をして甚だしく誤傳せしめて居るからである。而して又之れにブリーとの複雑な關係が絡んで居る。此處に於て真正なる登

山史の研究者が此のモン・ブロン初登頂の誤傳を闡明せんと奮起したのである。即ち其の研究者とは前出せる瑞西現代の大登山者たる彼のハインリッヒ・デュビイ博士である。

バルマアの大デューマに物語りし中に於てバツカルは洵に見窄しき影を止めて居る。例へばモン・ブロン初登頂とバツカルに就てバルマアのデューマに語りし處を擧げて見よう。

『え、其れは一千七百八十六年の事でしたよ。(とバルマアは語り出した。) 私は丁度二十五でした。現在いまは之れで七十二に成ります。其の時分の私は全るで悪魔の生れ代りか地獄で生れた様な野郎でした。食はず飲まずに三日間は山を歩きました。一度ビュエで迷つた事がありました、其の時なんか雪を少し喰つただけでした。度々モン・ブロンへも行きましたが、其の時モン・ブロンにさう言つてやりましたよ——お前の好きな事を言へ、勝手な事をしろ、俺は何時かお前を登つてやるから——と。』

と、バルマアは先づ自分の自慢話から始めて、モン・ブロンの登山に對する自己の苦心を語り、更らに愈々モン・ブロン初登頂に話がるが、此時のバルマアの話に依つてバツカルは其の登山に於ては悲愴な役割を務めさせられて居るのである。即ちバルマアが如何にバツカルを激勵して登山したかと言ふ事である。バルマアの語るには

『私が言葉盡くして激勵したがバツカルは駄目でした。私は幾ら言つても其れは唯だ時間が経つのみだと知りましたから、バツカルに何うか動いて呉れと言ひました。だがバツカルは唯だ「よし、よし」と返事して私を遠ざけやうとするのみでした。私は彼は寒さに苦んで居るのだと看破しましたから、彼に酒縷を渡し、モン・ブロンの頂上に登つて來てから又面倒を見てやらうと言ひ残して單身で登りました。バツカルは「よし、よし」と言つてました。私はバツカルにちつとして座つて居てはいけなと言ひ渡して出發しました。そうして三十歩も行つて振り返つて見ますと、バツカルは凍傷にならない豫防として走り廻つたり、足踏みをして居る處か、風向きの方向を背中にして座つて居ました。其の場所から上は非常な困難ありませんでしたが、然し登れば登る程次第に空氣は呼吸には不適當と成り、私は全るで

肺病の男みたいに二三歩登つては一息つかねば成りませんでした。そうして私には全るで肺臓が無くて、胸は穴みたい
に思はれました。其れで私はハンカチーフで口を蔽ひ包んで其れから呼吸して見ましたら、少しは具合が良く成りまし
た。然し寒さは益々強くなつて、私は一リーグの四半分を行くのに一時間もかかりました。私の登つて来た所を私は見
下しました。そして今度は私の眼を舉げて見たら、私の認め得なかつた地點に私が達して居る事を知りました。即ち終
ひにモン・ブロン^のの絶頂に達した事を知つたのです。私は私がモン・ブロン^のの頂上を誤つて居るのではないかと謂ふ事を
發見するのを恐れ乍ら、でも四周を見渡して見ました。すると私の周圍にはエギュー^のの或るものや新しい尖峯が聳えて
居ました。若しも其處がモン・ブロン^のの頂上で無いとしたり、私にはモン・ブロン^のの頂上に登る力は無かつた者なのです。
何故かと謂ふに私の脚の關節は漸く適當な位置を保つて居る程に私は疲れて居ましたから。然し其處はモン・ブロン^の
頂上でした。確かに頂上でした。私は登山の目的點に着いたのでした。是迄何人も、羚羊や鷲さえもやつて来た事の無
い高點へ私は來たのでした。私は何人の力も藉りずに、單身私自身の力と、私自身の意志とで其處へ達したのでした。
ですから私の周圍を取り繞る總べて物は皆私の所有の如くに思はれました。私はモン・ブロン^のの王——此の巨大なる臺
の上の彫像だつたのです。

其れから私はシ・モニイ^{の方}に向つて、杖の先端に帽子を載せて振り乍ら合圖をしましたら、其の答へがあるのを私
の望遠鏡で見ました。』

斯くて、バルマアはバックルを残した處へ歸つて見ると、バックルは眩暈を起した様な状態に成つて居たが、バルマアは
バックルを頂上へと導き伴つて行つて、午後六時少し過ぎに再び頂へ着いたと語つて居るのである。即ち尙ほ彼の語りし
所を誌さば、

『頂上にバックルと私とが着いたのは六時半でした。日のあるのは餘す所二時間半しかないので、私等は直ちに降りな
ければならなかつたのですよ。私はバックルの腕を支へ乍ら、もう一度帽子を振つて谿に居る二人の友達に最後の合圖

をし乍ら降り始めたのでした。私等を導く足痕はもう残つては居ませんでした。氷の上に私等の見る事の出来たものは唯だ私等の杖の鐵の石突の作る小さい穴だけでした。バックルは全るで体力も意力も無くなつて、小兒より仕末が悪く容易な場所は私が先に立つて導きましたが、悪い場所では彼を背負ひました。クレヴッスを横切つた時には既に夜に成りかゝりました。漸く私等がグラン・プラトウの麓に達した時、夜は全くやつて来て仕舞ひました。毎瞬間バックルはもう一步も先へは進めぬと言つて止まりましたが、其の度毎に私は彼を説伏するのではなく、力づくで無理矢理に彼を歩かせました。十一時に漸くの事で終ひに私等は氷の境域を逃れ出ました。そうして陸地の上に足を置きました。日没の残映は一時間も前に消えて居ました。其時私はバックルに止まつてもいゝと言ひました。そしてバックルの手は全く利かないのを看取しましたから、彼を毛布で包んでやる用意をしました。又彼の手が利かないか何うかと言ふ事を問ふて見ましたら、バックルは指先は最早何等の感覺も無いと答へました。其處でバックルの手袋を脱いで見たら眞白く凍傷して居ました。私は又私で指に痺れを感じました。私の厚い手袋の代りにバックルの小さい手袋を穿めた手が痺れたのです。私は彼に自分達の間で三本の手は凍傷に罹つて居ると言つてやりましたが、然し其れを殆んど彼は氣に掛る事も無く、唯だ横になつて眠りたいと言つて居ました。だが彼は凍傷に罹つた部分を雪で磨擦する様に言ひました。雪は餘り遠くに行かずに在りました。早速私はバックルの方から其の手當を始めて、私の方を後廻しにしました。直ちに血行は元に戻へり始め、其れと共に温か味が戻り、血管は全るで針で刺される様な激痛を感じました。私は毛布で私の小兒【筆者註。バックルを謂ふ】を包んで岩の蔭の寢床に置きました。私は僅かの食物を喰べ、水を一杯飲んだだけで出来るだけ互ひに身体を寄せ合つて眠りつきました。

翌朝六時にバックルは私を起しました。そして彼は言ふのに——おい、バルマア、可笑しいぞ、私には鳥の鳴くのが聽えるが、日の光が見えない。必つと私は眼を明ける事が出来ないんだ——と。處が彼の眼はちやんと明いて居たのです。其處で私はバックルに君は何うかして居るのだ。確かに見える筈だと言つてやりました。するとバックルは私に

雪を少量取つて呉れと言ひまして、其の雪を手の凹みに融かして、其れで眼を擦りましたが、そうしても少くも以前と變りはありませんでした。寧ろ尙ほ眼を痛めた様でした。バツカルは言ひました。——バルマア、傍へ来て見て呉れ、私は盲目になつた様に思へるから。一体何うして私は此處から下りたら良いかしら——と。私は言ひましたよ！私の背囊の紐を確かかり持て！そして私の背後から歩め！其れが君のする事だ。そして斯様にして私等は下りて来て、ラ。コートの村に達しました。其處で私は私の家に残した妻が何んなに私の事を心配して居るかも知れないと思つたので、バツカルを其處に残して急いで家に歸りました。バツカルは杖で探りぐぐ家に歸りました。家に歸つて始めて私は私自身の顔を見ました。其れは少つと始めは自身の顔ではないと思つた程に變つて居ました。眼は眞赤に、頬は眞黒に、唇は眞青でした。そして笑つたり欠伸をしたりする度に唇や頬から血が出ました。そうして私の眼は暗い室でなければ見えませんでした。

ではバツカルは其後ずつと盲目だつたのかい？（大デューマが問ふた。）否え、バツカルは十一箇月以前に丁度七十九で死にましたが、其の時でも老眼鏡を掛けずに讀む事が出来ました。唯だ、彼の眼は悪魔の様に眞赤でした。（バルマアが答へた。）其の登山の結果彼はどうかだつたね。（大デューマが問うた。）其れに就ては何んにもありませんや。（バルマアが答へた。）其れは何故に？（大デューマが問ふた。）だつて彼奴は酒呑の方でしたからね。（と言ひつゝバルマアは三本目の纜を空にした。）（Dumas, Impresions de Voyage: Suisse.）

以上バルマアの大デューマに物語りし所のものが決して眞正なるモン・ブロン初登頂の記録で無い事は明らかである。乍然其の眞相が明らかに成る迄には一世紀以上の年月が必要であつた。何故ならばモン・ブロン初登頂に關して其れに加はりし此の二人の者は何れも詳細にして満足なる報告を自身で發表しなかつたからであつた。尤もバツカルは初登頂後直ちにローザンヌに來り、彼の爲せし登山記出版に關しての豫約者を募る趣意書の如き印刷物を公にした。此の趣意書は今日でも残つて居て、其の寫しはアルバイン・ジャーナル（Vol. XXV, 1912）に掲載せられて居るが、フレッシユフィールドは

バックルの豫約募集せしモン・ブロン初登山記を歐洲の汎ゆる圖書館で搜したが見當らない處から、其は結局後述する理由に依りて共刊の運びに到らなかつたものと推斷したのである。モン・ブロン初登山の真相の最後の解決は既に前出せる如くに三人の登山史研究者、即ちデュビ博士、フレッシュフィールド及びモンタニエに依りて爲された。デュビ博士の著『バックル對バルマア』(Paccard wider Palmst, oder Die Entwicklung einer Legende.)は此の登山史上の有名な事件に最後の言葉を與へるものである。其に關説して讀者はデュビ博士の考證の精要を彼のフレッシュフィールドが、『バックル對バルマア』の立派な批評 (Alpine Journal, May 1913) の中に見る事を得るのである。即ち其は左の如きものである。デュビ博士は此の大登山を目撃せし日記を入手する事が出来た。即ち其は前出せしバロン・フォン・ゲルスドルフの作りたる登路を記入せしスケッチと覺書に其れにシヤモニイの公證人たりしバックルの父の請に應じてゲルスドルフが彼の友人フォン・マイヤーと共に署名したる證明書である。此の證明書は今日尙ほシヤモニイに保存せられてあると謂ふ。然してフォン・ゲルスドルフの日記は漸く最近に到りてゴエルリツ (Görlitz) に於て發見せられたのであつた。同日記中には重大なる一句がある。即ちフレッシュフィールドの譯す所に從へば「彼等は再び(フッティ・ロツシエル・ルージュからフレッシュフィールドの註)五時四十五分に出發した。而して約百碼毎に少つと休み、屢々先導を變へた。(傍點はアーノルド・ランの附せしもの)六時十二分に雪より突出して居る二個の岩に達し、六時二十三分には實際の頂上に達した。」と謂ふのである。以上の傍點を附せし言葉はバルマアが終始先導はしなかつたと謂ふ事實を證左するものであり、其れ以外の文はバルマアのみが頂上に到りし最初の者でなく、デュビに依りて傳えられし物語の全体が全然虛構のものである事を明示するものである。(以上バルマアに關する一部分はフレッシュフィールドに依る以外 Arnold Lunn, The Alps, pp. 62-63, 67-74 に依る)

然るにデュビ博士の以上の確證以外に更らに又フレッシュフィールドは其後ジュネーブ在任の現在ソッスニールの曾孫に當る Horace de Saussure 他ソッスニール家の人々より今日迄未發表となり居りしソッスニールの日記を借りて、其中に又モン・ブロン初登山に關してバックル家にソッスニールが同年の八月二十二日に彼のモン・ブロン登山 (天候不良の爲め

登頂せず) 後招待され、其際バックカル自身と會談し一切を記せるものを見出したのである。右はデュービ博士の擧げし證明以上に有力にして巨細に亘るモン・ブロン初登頂の真相を吾人に展開せしむるものである。即ち右日記の重要な部分を左に摘記して掲ぐるならば

『吾等(ソッスニール、バックカルを謂ふ)は終ひにモン・ブロンに對するドクター(バックカルを謂ふ)の登山に關して話し合つた、彼れ(バックカル)は頂上近くにて雪の中に大なる霰の粒を發見した事、新しい雪は古い雪よりも遙かに眼を疲らせる事、而して此の事實が登山中での一つの失策以上の重大なる結果を齎らした事を語つた。余は完全に彼の登路を知る事が出来た。氷河を横斷した後彼は右手に寄つて余の小屋(ソッスニールはバルマア、バックカルの初登頂後直ちに小屋を建てた。)の建てる黒き岩(グラン・ミユレ)に沿ふて行き、彼がグロ・モン(Gros Mont)と呼ぶドーム・デュ・グーテの麓へ曲つた。其の麓に近く沿ふて其の右手へついで行き、長い登行の後大なる雪原、尠く共緩傾斜の雪面に達し、其を左手へ行き、雪の無い高き、垂直なる岩の二つの間にある雪の土手に達した。而してモン・ブロン(の頂上)の下を取巻いて居る右手の岩の頂を越え、東に充分に曲つて更らに再び南に探つて最後の甚だ急で可成り困難な斜面を登つた。頂上の雪は思ひの他軟かで、思ふ儘の深さにバロメーターを立てる事が出来た。

頂よりヴァル・ダオスタ(Val d'Aosta)側へは緩い斜面が續いて、鋭い頂稜に立つて居る岩頂(現今の Mont Blanc de Courmayeur)へ達する事は出来さうな事だつた。彼は頂上で寝られる様な場所を捜したが、何處も一体に風と寒さが強かつた。彼は最後の斜面の下で雪の上に幾らか出て散在して居る岩と其の上少して、頂上からは約百歩下に、例のシャモニーから遠望出来る二つの小さい岩を發見した。歸途彼等は四度も雪に蔽はれたクレヴァスに墜落せんとして其の都度に深い底を見たが、幸ひ彼等は又其の度に雪の上に持つて居る長い杖を水平に横へ、又其の上に平たく身体を載せて災禍を免がる事が出来たが、其の後は彼等の二本の杖の端を兩方から持つて並んで歩いて行つて、クレヴァスを横切つて行つた。其の方法は梯子を持つて行くより良い方法だらうと彼は言つた。彼の成功は余がビュエに於て行へる疲

勞と其の快復との周律に關する觀察に負ふ事大なりと言つた。彼等が非常な高距に到りし時、彼は彼の力と呼吸とを快復する爲めに毎百歩毎に休まねばならず、又より以上の高距に到つてからは毎十四歩毎に休んだが、休むと直ちに余も又注意せし如くに、力は快復したと言つた。余の第一の小屋（モンターニユ・ド・ラ・コートに建てられたる）を午前四時に出發せしに、余の第二の小屋（グラン・ミユレ）に達せしは正午少し前であつた故、第二の小屋より出發せば、日中の早きにモン・ブロン^の頂上に達せらるゝであらう。彼等に雪燒と雪盲の影響が翌朝迄顯はれなかつたと云ふ事は不思議な現象である。彼等は一休息もせず下つた。而して深夜（筆者註。午后十二時の意）少し前にモンターニユ・ド・ラ・コートに止まり、其の時迄何等の苦痛に惱まされなかつたが、翌朝黎明にブリオリイに彼等が降らうとしたら、ドクターは充分に路を見る事が出来なかつたので、止むなくバルマアに案内された。ハッカルが言ふのには、下山の途中で一夜を過ごすのは、翌朝眼を覺ました時眼が弱つて居るから不便だと。兎に角其の事實は何人も太陽の反射に對して豫防の方法を講じなければならぬと云ふ事を示すものである。又彼は彼のポケットに入れて居たインキ縵の中のインキも、又バルマアの背袋の中に入れて居た肉も凍つて仕舞つたと云ふ事を確言した。又彼の手が比較的甚だしく寒い寒さで凍傷に成つたのは、彼が濡れた皮手袋をして居たからだと言つて居た。彼の手は黒色で感覺も無かつた。而して彼の指先は尙ほ痺痺して居ると言つて居た。彼はバルマアの有つて居た毛皮の手袋と自分のとを取り換へて見たらバルマアも凍傷に罹つたと言つた。其れで共に雪で摩擦して其れを癒した。

彼とピエールとはジャック・バルマアに同意して登山の最好期は六月の始めであらうと言つた。其れはクレヅスは狭く冬雪は夏雪よりも確實であるからである。日中の長いと云ふ事も又一長所であると。バルマアはハッカルが若し時々先導を務めて雪面を踏んで呉れなかつたら、彼れ（バルマア）は到底頂上迄達し得なかつたらうし、又ハッカルは頂上に到る迄先導を時々務めたと云ふ事をハッカルに言つたと謂ふ事である。余はハッカルとの會談の後の餘れる時間に此の日記を認めたのである。』

此の日記はモン・ブロン初登頂後二週間を経てバックルより聴きたる事を人として最も正確なる人格を有せるソプスニールの自記せしものである。此れに依りて更らにデュービ博士の證せし以上に、バックルが無能力なる登山者にて彼の勇敢なる同行者に依りて頂上へ曳き上り上げられたと云ふブウリイに依つて虚構捏造せられ、更らに大デューマに依つて雄辯にも裏書され、粉飾せられたモン・ブロン初登頂の物語（歴史には非ずして）は全く影を消す可きである。然ればフレッシュフィールドは公言して曰く『アルバイン・クラブは今日彼のシャモニーに建つソプスニールとバルマアの記念像の傍らに須らく此の今日迄看過され、蔑視され來たりし真正なるモン・ブロンの初登頂者の一人なる村醫バックルの紀念の爲め又一像を建立す可きである』と。(Freshfield, op. cit., pp. 21+216)

以上を以て大体バックルとバルマアの問題は誌される事になる。斯る問題を惹起せし原因はバルマアの卑しき人格と大デューマの物語に依るよりも寧ろ深因はブウリイに存したのである。而して其れの今日迄約百年間明白と成らざりしは一にソプスニールの日記の公表せられざりしに依る。

ブウリイに就ては前出に於けるが如く一言し置きしが、讀者は彼が如何にモン・ブロンの登頂に對して熱烈に心身を打ち込んで居たかを知るであらう。然るに彼れ自身の度々の登山は失敗し、バルマア、バックルの初登頂に依つて彼の年來の宿望は碎かれ終つた。ブウリイは兎に角各方面に於て優れた人物であつた。殊にアルプスに對しての彼の熱は素晴らしきものであつた。彼は正當に『アルプスの歴史家』の肩書を獲得した。而して又彼より運の好かつた登山者に對しても甚だ寛容であつた。然るに前述のモン・ブロン初登頂に關してバックルに對して彼の爲せし中傷は彼の生涯での瑕疵不徳であつた。

彼にはバルマアは見逃す事が出来たのである。何故ならばバルマアは單に案内者に過ぎぬからである。乍然アマチュアであるバックルに對して彼は許し難き曲事を敢行したのであつた。即ちブウリイは一千七百八十六年九月廿日に於てバックルが彼のモン・ブロン初登山記を發行せんとして居るを阻止せんが爲めの中傷的なる一文を草し小冊子の体裁にて初め



63.

50 K. M. コース途中の永田君

タイム 6時02分42秒



50 K. M. 1位 Hedlund (Sweden)

タイム 4時52分37秒

は公表したが、後又其を數々の新聞紙にも掲載した。乍然吾人は爰に其の全文を再現せしむるの要はない。同文中に於てブッリの爲さんと務めし所の要點は、バックカルは同登山中の頂上に達せんとする最重要な場合に弱り、バルマアは彼を置いて頂上に達したが、又戻つて來てバックカルを頂上迄曳きずり上げたと言ふ事、然るにバックカルはバルマアの功績を自分の爲めに利用して自らがモン・ブロンンの征服者たりと公表せんとしつゝある事、其の結果として、新聞紙、印刷物に據る廣告の如何なる力を有するかを知らぬ一田夫に過ぎぬ憐れなるバルマアの正當なる功績は全く看過されて仕舞ふであらうが爲め、彼ブッリはバックカルの出版す可き著書の豫約者に訴えねばならぬと謂ふが如きものである。乍然彼のバルマアの眞の性格が生來の法螺吹きである事實を知る所の人々は之れを讀みては微かに苦笑するのみであらう。而して既にモン・ブロンンの初登頂の眞相を知悉せるソッスニールは此のブッリの不徳行爲に關して其は結局自らの愚を示すものなりとブッリを戒めた如くにて、其れに依りてブッリも彼の中傷的言辭に關して多少訂正を爲し當初彼の想像せし以上にバックカルが同登山に於て重要な分前を有する事を不承不承認めし所の追伸を加へる事に成つた。即ちブッリは彼の明敏なる同時代人たるソッスニールよりも信ぜられなくなつたソッスニールは彼の家の傳統に従つて判ずればブッリに關して何か誌して居る如くであるが、其れよりもソッスニールの有名な家僕たるベルン州生れのウイテンバッハ (Wittenbach) は甚だしくブッリを悪く曰つて居る。即ち彼は誌してブッリを評するに『ブッリを知つて居る者は皆彼が自惚の強いおべつか者であり、輕薄な馬鹿者であり、而して大袈裟な法螺吹きであると言ふ事は能く知つて居る』と。乍然フレッシュフィールドは最後に當時の碩學にしてソッスニールの友たりし彼のシャル・ボンネ (Charles Bonnet) の『然れど又吾等は彼の熱心と勇氣とを考への中に入れねばならぬ』との如き言辭を以て終れるブッリに對する一の溫きそして一層辨別ある評言を引用して曰ふに『此の言を以て最後として吾人をして其れ以上ブッリに就きて言ふを止めしめよ。如何となれば唯だ山岳に對しての熱情のみを以てしては彼は吾等登山者の一人たり得るを以てである』と。以上を以てモン・ブロンの初登頂に關しての紛糾せる挿話は終りとする。

扱てモン・ブロン初登頂の報導はいち早くシャモニの旅館の主人たるテラツの特別な使者がジュネーヴのソッスールの下に達した。同時に又バルマア自身も數日後即ち八月十三日自身ソッスールの下に赴きて兼ねての賞金を享け、將來ソッスールの爲めに案内者としての勞力を提供する事を約した。之れに依りソッスールはシャモニに赴き、二ヶ所に小屋を建てさせてモン・ブロンに登頂せんとせしも其の年の夏の天候は終ひに彼の登頂を許さず翌一七八七年又天候を待つ事多く、漸く八月三日ジヤック・バルマア其他の案内にて年來の宿望を達してモン・ブロン第二登頂を爲した。勿論其の登山はソッスールの科學的實驗を成さんと言ふ爲めもあつたが、今日に比較しては非常に大袈裟に行はれたものにて、其の二三の例を擧ぐれば多數のシャモニの案内者は之の爲めに使用され、其の準備した品の中にも科學的實驗用又は實際の登山用の物品以外ソッスールは自らの爲めに敷蒲團、掛蒲團は勿論綠色の掛布迄附いた寢臺や衣服では大きな綠色の上衣二着、寢衣二着、靴三足を携へ、天幕、梯子の他バラソルと其の容器がリストの中にあると言ふ程のものであつた。掛布の附いた寢臺の如きは十九世紀の登山者には如何に考へても登山には贅澤品としか考へられぬものである。然して此の大仕掛な登山隊がシャモニを出發する時シャモニ、谿谷の總べての人々は其れを見んとして集つたと謂ふ事が傳えられてゐる。此の時の登山の様子悉皆はソッスールが彼の著『Voyage』及びフレッシュフィールドが手にする迄全然未發表と成つて居た彼の日記に委しい。然し此處に於ては其れに就て詳しく誌する事は出来ぬが、其れは科學的探究の目的としての初めての登山として永久に登山史よりは消失せらる可きものでは無い故に、其の概要を左に誌さねばならぬ。

即ちソッスールは八月一日朝先づ十八名の重き荷を負へるシャモニの案内者を先發せしめ、自らは忠僕テーチュ(Teich)と共に其の行程の最初の二時間、シャモニより八百呎の高距迄は驢馬の背に依りて登り、其れよりは徒歩にてボッソン氷河とタコンナ氷河間の長き山稜を登りて六時間半を費してモンターニユ・ドゥ・ラ・コート(Montagne de la Côte)の頂に達し同所の氷河に依りて運ばれし大なる堆石の傍に天幕を張つて露營した。翌日の八月二日は多數の登山隊の爲め必然的に出發は遅れて六時半に同露營地を出發した。其處より上の大なるクレヴァス・ヤセラックの迷路を進むの際してシャモニの案内者は勇敢で且つ巧み

であつた。殆んど三時間を其の水河の恐しい悪場に費したが、然し其れより上の斜面は尙急であつた。其れを越えてグラ
ン・ミユレと現今稱されて居る地點に達したが、其處へ着いた時案内者は永い間休憩して動かうとしなかつた。其れは時間
を遅らせて岩の無い様な高距へ早く着かない様にとの考へからであつた。其れと云ふのは案内者等は雪の上に寝るのを非
常に嫌つて居たからであつた。然し其時は未だ午前十一時に過ぎなかつたので彼等は止むを得ず出發した。此の間ソッス
ルーは岩質を調べたり、又はエギイユ・デュ・ミディの下の凹所より轉落し來つた巨大な氷片を嘆稱して望んで居たりした
登山隊が登るに伴れ、レマン湖の一部分がニヨン(Nyon)と共に見え始め、フシニイ(Faucigny)の山脈は次第に地平線
に沈み始め、最後にはエギイユ・ペルセ・デュ・ルボソワール(Aiguille Perce du Reposoir)も遠くアラ(Jura)の青き線の下
に沈んで仕舞つて、此の登山隊の登行の程度を知らせる最も明確な證據は此の展望の擴大と云ふ事で唯だ其れのみによつ
て登山隊は元氣付けられて居たとソッスルーは自ら記して居る。巨きなクレヅラスを越えて午後一時半にはグラン・ミユレ
の最高點の岩にて歸途の際に其れを「幸運なる歸途の岩」(Rocher de l'Heureux Retour)と名づけた點に達し、同所で一
行は充分な食慾を感じて晝飯を攝つた。然し水が足りなかつたので、案内者は面白き方法を持つて水を得た。其れは日光
に充分暖められた岩壁に皆雪の球を投げつけて、其れが融け滴るのを容器で受けるのである。同地點より三十分にしてブ
テ・プラトウに達した。モン・ブロン^のの絶頂は眼前に在つた。乍然登山隊の登行は到つて遅く、午後四時に漸くグラン・ブ
ラトウに達して其處に露營と決した。露營の準備の爲めに雪を掘りし案内者等は空氣の稀薄の爲めに屢々休息を必要とし
他の者は其の間寒氣の爲めに困却して居たが、ソッスルーは其の間高度計觀測の爲めに全く身心を打ち込みつゝあつた。
此の眩暈たる雪のみの地の其の寒氣と靜寂、荒涼を親しく觀てソッスルーは始めて此のモン・ブロン^のの頂を踏みし彼の先
蹤者たるバツカルとバルマアが、庇蔽所一つ無き此の雪の荒原に救護に對する期望も無く、又彼等の到達せんとする高距
に於て人間は生存し得るか否やの確證も無くして而も夕刻に達して彼の大登山を遂行せし其の確固たる決心と勇氣とを嘆
賞したのであつた。グラン・プラトウの露營に於てはソッスルーは山岳病、痲痛、及び天幕内の惡氣等に注意して寢た。

其の夕食にも到つて彼の食慾は減退して居た。案の如く夜中彼は好く寝れなかつた。翌三日は日出と共に起きたが案内者等の行動も著しく遅鈍にて漸く午前六時に頂上に向つて出發した。之れより高距に於ける影響は漸く甚だしく、爲めに登山隊は毎三十歩に休息し、其の登行は甚だ捗らなかつた。殊にモン・ブロン頂直下の九百呎の斜面に於てソッスニールの山岳病に據る苦痛は激しく、彼は意識稍朦朧として眩暈を感じ、毎十五歩より六十歩の間で必ず杖に倚りて休息せねばならぬ程脚力も弱つて居た。其故登山隊は此の最後の斜面に彼のウインバーの案内記 'Guide to Chamonix and the Range of Mont

Blanc, 1896' には五十分で充分なりと誌されてあるのに約二時間を費したのであつた。然ればソッスニールは誌すに『頂上近くの斜面に二時間も居たが故に、余は頂上より望み得る殆んど總べてのものを永い間見て居た。其れが爲めに頂上に達しても、其れは所謂芝居のヤマ (Comp de théâtre) と同じく登山の最高點では無く、唯だ嬉しく感ぜしは余の登行の苦痛の最早終りしと云ふ事のみにて、其の苦痛に對する回想は回想する度不愉快である。然れば頂上を蔽ひし雪の最高點を踏みし瞬間余は其の雪を愉快と云ふよりは寧ろ怒りに似た感情を以つて踏んだのである。何故ならば余のモン・ブロン登頂の目的は單に其の最高點に達せんと謂ふのみではなく、寧ろ其の如き高距に於ける諸般の觀測と實驗に在りて、其れのみが余の登山に對して大なる價値を與へるものであるのにも拘らず、余は此の山岳病の爲め充分に頂上にて余の期待せる事を行ひ能はずと思ひし爲めであつた』と。とは言へソッスニールは彼の身体的不愉快さに弱り科學的研究心のみに興味を向けて居たとて、彼のモン・ブロン頂上に展げる所の廣大にしてアルプスにて最も壯大なる其の山頂展望の美には打たれざるを得なかつたのであつた。即ち東方にはエギニユ・ヴェルトとグラン・ド・ジョラスの大山群が前景として氣高く魁偉なる峯頂を聳えさせ、其の向ふの彼方ではヴァレの黒き森の斜面、綠金の牧場がオーバランドの峯々とベンニンの雪とを差別づけて居るし、南方には直として白く眩めく街道が細き飾紐の如くに光り居るヴァル・ダオスタの谿谷の深みがگران・コンバンとモンテ・ローザの二山群とリュイトルの銀白雪の楯とグレイアンの尖鋭なる岩の槍先とを分け、南西遙の方にはグレンノーブルの上なるヴァル・ディゼールの黄金色に色づける畠野と綠色の牧場とが眞晝時の日光を浴して輝き、ドウフイ

ネの遠きに阻立てる巖の墻壁が其れを限つて居た。又北西方に眼を轉ずれば、ジュラの高所は宏大なる展景を横切りて青き飾紐の如く横はりつゝ、瑞西の湖と低地と其れから其の涯は紫水晶色に遙けき地平線に融け合ふ迄延び擴がれるブルガンディヤフランシココンテ (Franche Comte) の平原との境界を成して居た。ソッスニールは此の如き宏大なる山頂の展望を眺め、或ひは觀測實驗に従ひつゝ四時間半も頂上に留まりて後、午後三時半彼の永年到達せんと望み居りし歐羅巴の最高點を(當時は斯く考へられて居た)を去つて下山の途に着き、午後七時十五分前出せる『幸運なる歸途の岩』なる地點に達して其の地に露營した。翌朝六時十五分に露營地を出發して往路を戻り、レ・モンよりは驛馬に乗りてル・ブリユールの村に達し、同地にてソッスニール夫人と彼の義妹、彼の娘の義母に當るホッカー・ドゥ・ヂイルマニ夫人の出迎ひに來たりしに會ひ、無事に登山を終えし喜びを夫人等に述べたのであつた。夫人等はシャモニにて強度の望遠鏡を以て其の夫君一行の登山の有様を逐一注視して居たのであつた。下山してはソッスニールは少しも疲勞の感を感じず、雪盲にも罹らず、唯だ少しく日に焼けしのみ成りしと誌して居る。以上を以つてソッスニールのモン・ブロン登山の大要は終る。乍然尙ほ此のモン・ブロン登頂の翌年たる一七八七年にソッスニールはコルドッ・ヂェアンを越え、而も其の頂上(一一、〇六〇呎)に約十七日間も滯留して種々なる科學的觀測に従つたのであつた。斯くの如き高距に於けるアルプスの雪上に斯くの如く長時に亘りて天幕を張りて滯留せし事は其の以前には勿論例なく、又其後四十年間は行はれざりしものであつた。ソッスニールの此の間觀測せしものは主として氣象學のものにして、其れは彼の著に評述せられてある。(Voyages, p. 209以下)

バルマアは又此時案内者として務め、又其後も度々ソッスニールの登山には勞力を提供して居たが、吾人は此處に彼の其の後の生涯に關して一言したい。バルマアはモン・ブロン初登頂以來純然たる山案内者を生業とし、彼の此れに對して適したる資質の結果は可成りの收入を得、其れを貯蓄して金額も相當と成つた。彼は其の金を何か有望な方面に投資せんとして居た際、偶々街道にて二名の銀行家と名乗る人物と出會し、五分の利を拂ふ約で其人に彼の貯蓄した金を貸した所其れは巧く欺されたのであつた。此の事件ありて後間もなく、即ち大デューマと出會して彼のモン・ブロン初登頂の話爲し

てより五個月後、彼れはシックス (Sixt) 谿谷の上なるモン・リュアン (Mont Ruan) の山腹に在りと謂ふ傳説の金礦を發見せんと赴いて却つて死した。此の奇怪なる事情の一切は彼の高名なバイオニーヤにして英國山岳會第三代の會頭たりしアルフレッド・ウィルズ (Sir Alfred Willis 1828-1912) の著 'The Eagles' Nest' (1860) の中に詳しく述べられてある。バルマアの子に當るオーギュスト・バルマア (Auguste Balmat 1808-1862) は有名なる山案内者にて彼の氷河學の泰斗ジェームス・デヴィッド・フォーブス (James David Forbes 1809-1868) や其の弟子たりしサァ・アルフレッド・ウィルズの案内者を務めたのであつた。

扱て當時に於ては大膽にして、又科學的見地よりしては驚く可き成功を收めたるコル・ドゥ・ディアン^エの登山はソッスニールに對しては彼れの登山經歷の最も適當なる終尾と成らんとして居た。即ち齡正に五十歳に近き彼れは此のコル・ドゥ・デエ^エアの登山以後毎夏は彼の家族と共に何れの莊園ジャントウ (Genthod) で靜かに送ることを樂しみと爲した居た如くであつた。斯くソッスニールをして暫く登山を爲さしめざる理由は他に大なる原因があつた。其れは彼の佛蘭西大革命とジュネーヴ政府の危機であつた。前者はソッスニールを個人的に苦しめた。何故ならばソッスニール家は當時佛蘭西に多額の資本を投資して居たが、其れが革命の爲め全く失はれて仕舞つた事であつた。又後者ジュネーヴ政府の政變に於てソッスニールは彼の生涯で三度目に彼の政治的手腕を發揮す可く餘儀無くせしめられたからであつた。乍然山岳の呼聲は餘りに強かつた。斯くて彼はモン・ブロンに次ぐアルプス第二の高岳たるモンテ・ローザに興味を有ち、其れを究めんとした乍然勿論モンテ・ローザへは登る事は能はなかつた。一千七百九十二年彼はサン・テオデュールの峠を伊太利亞側より彼の長子テオドルと共に數多のシヤモニイ案内者を伴ひて登り同峠頂上 (一〇、九〇〇呎) に數日間滞在して氷河、山頂高度の觀測に従事した。彼はマッターホルンを測つて一四、七六六呎 (實は一四、七八二呎) と成し、アルプス第二の高峯と成した。此れは彼が其の近くに在るリスカム (一四、八八九呎) ドム (一四、九四二呎) 及びワイスホルン (一四、八〇四呎) 等をモンテ・ローザの部分と思ひて敢えて測らなかつた故であらうとのことである。此の觀測を終りて後彼はブライトホルンに

登頂せんとしたが彼の力と勇氣より山は勝つて居たので、彼は小モン・セルヴァン (Little Mont Cervin) (ツッスニールは其れを Cime Prune du Breithorn と記して居る) に登頂した。此れはツッスニールが登頂せしアルプスの峯頂ではモン・ブロンに次ぐ高頂であつた。次ぎに彼はテオドールホルンに登つた。ペンニン・アルプスに於けるツッスニールの登山は一千七百七十六年より一千七百九十二年迄の間で僅かに二三年訪れたに過ぎぬが、彼の登山は一の大なるセンセーションを惹起し、爲めに科學者としての彼の名聲は彌増し高く成つた。乍然彼は既に一千七百六十八年に英國の王立協會 (Royal Society) の會員には選舉せられて居た。此の一千七百九十二年の登山はツッスニールの最後の登山であつた。之れより四年の後なる一千七百九十六年に到つて彼は彼の生涯での主著たる *“Voyages dans les Alpes”* の第四卷を上梓したのであつた。此著に關しては前述せし所なるが尙ほ同著の現今にての價值に就ても登山史の大家クーリッヂは謂ふに、『此書は假令其の自然科学に關する部分は全然歴史的重要性のみをしか有せぬと雖も、而も尙ほ今日に於ても興味と且つは利益とを以つて吾人の繙讀し得る所である』(Coolidge, *Swiss Travel and Swiss Guide-Books*, 1889, p. 175.) と云つて居る。

扱て以上是迄縷述せし所は、主としてツッスニールの物理學者として、又アルプスの探究者としての科學者的登山者の經歷なりしが、固より以上彼が家庭生活とジュネーヴ共和政府の卓越せる政治家としての彼に及ぶ事無くして、以つて、*“Voyages dans les Alpes”* の著者の全生涯の姿は完全とは成し難い。洵にツッスニールは十八世紀後半に於ける當時のジュネーヴ市の有能なる貴族社會の一人たるの例に洩れずして其の全生涯を通じて社會的、個人的及び政治的に種々なる業績を成した人である。彼は常に精勵なる大學教授にして又多方面的なる科學者たりしのみならず、熱心なる教育家にして、時態の彼を要する時には政治家としての卓越なる手腕を振ひて、其の一千七百六十六年より同六十八年に亘るジュネーヴ共和政治の政變難局にハラを援けて當り、又後年に到りてはジュネーヴ共和政治の混沌たる細流に一千七百八十九年より同九十四年の間献身的に棹さして、巧みに其佛蘭西大革命の洪水中に危く捲込まれんとせし彼の生地ジュネーヴ市を救つたのであつた。乍然筆者の彼の小傳を誌さんと企圖は全然登山史上に於ける彼の生涯に其の限界を止むる事と爲

せるを以て爰に於ては此れ以上彼の其の方面に就ては誌す事とはせぬ。又ソッスニールも彼の生市に對する最後の貢獻を成せし後は永く晩年を續ける事は出來ず、一千七百九十九年一月彼はジュネーヴなる彼の宏壯なる邸宅にて病床に就き、其の月の廿二日朝、夫人、愛娘、親友等の圍める病床上其の愛子テオドールの胸に抱かれつゝ平和に永眠したのであつた。ジュネーヴ市は其の最も卓越せる名士にして忠實なる市民なりしソッスニールの死を飾るに市葬を以てしたと謂ふ。而してソッスニール家は今日尙ほジュネーヴに歴として榮えて居ると謂ふことである。(此稿完)

附記

斯る若卒無難なる一小稿を記するに當り貴重なる藏書の多數を、筆者の爲め參考資料として供されたる横有恒、早川種三、成瀬岩雄の先輩知友諸氏の御好意を感謝することを特に爰に記し、以て筆者が微意の一端とす。(昭和三年一月十八日送稿に當り記す。筆者)

七十九號『登山史上の人々』正誤表

| 誤 | | 正 | | 誤 | | 正 | |
|---|----|----------|----------|----|----|--------------|--------------|
| 頁 | 行 | 頁 | 行 | 頁 | 行 | 頁 | 行 |
| 1 | 4 | 嶺 | 嶺 | 6 | 4 | ソッスニール | ソッスニール |
| 2 | 4 | 登山家 | 登山史家 | 6 | 8 | Voitons | Voitons |
| 2 | 10 | ことに | こと | 6 | 16 | 逍遙旅行 | 逍遙遊行 |
| 2 | 11 | Précédés | Précédés | 10 | 4 | Preliminaire | Preliminaire |
| 5 | 18 | 嶺 | 嶺 | 10 | 10 | Genevae | Geneve |
| 6 | 19 | 成やる | 成るや | | | | |

海豹皮の利用に就て

——特に北海道の山岳に於ける——

伊藤秀五郎

こんにち内地に於ては、スキー登山に海豹皮を使用することは極めて一般的である。それは寧ろ必需的な用具の一つとさへなつてゐる。私の極めて貧しい経験を以てしても、例へば、島々から上高地へ越す徳本峠の登りの如きは、絶對的に必要であるといつてもいゝ位である。然るに北海道に於ては、從來海豹皮の使用は閑却され來つた。そして一般的にスキー登山の盛になつて來た現在に於ても、なほその使用はそれ程一般的になつてはゐない。現今此を使用してゐるのは殆んどたゞ北大の山岳部に限られてゐる。私はこゝで、特に北海道に於けるスキー登山について、海豹皮の効用を考へてみようと思ふ。

最初に海豹皮の一般的な効用に就いて考へてみる。海豹皮の使用に依る最も有利な點は、登高に於ける時間の經濟といふことである。地形や積雪の状態や雪質などに依つて相違することは勿論であるが、普通スキーを以つて高さ二〇〇米を登るに一時間を費すといはれてゐる。(これは私達の経験に依つてもさうである。)そして海豹皮を用ふれば、大体一時間に三〇〇米を登ることが出来る。故に一時間の登りに於て、大約一〇〇米程の差を生ずることになる。今、一二〇〇米を登るに、海豹皮を用ひない場合に六時間を用するところを、是を用ふれば僅かに四時間で達し得ることになる。かくの如

く登高に於て著しく時間が節約されることは、登山に於て殊に冬季の登山に於ては甚だ重大なことである。山岳の規模が大きくなればなる程、そしてスキーに依る登高時間が長くなればなる程、このことは重要な意義をもつてくる。そしてこのことだけで已に使用の價値は十分である。

次に考へ得る有利な點はツイックツアックを急に刻み得ることからして、ブッシュ多き斜面 (Gebüschzone) (或は積雪少く未だ全くブッシュが雪で被れることなき時にも) 又は岩石の凹凸の突起ある個處 (Carapè Gehäse) に於ても、比較的樂な自由なコースを選ぶことが出来る。密林中の稍々傾斜の急な夏道だけが登高路である場合などは寧ろ必要缺く可からざるものである。また狭き谷や、瘠尾根を傳ふ場合殊に風に依つて小さな凹凸の生ぜる時に、キックターンの數を著しく減少し得る。更にメンバー各自のスキーの滑り方が一定する爲、その中のある數だけが特に後滑して苦しむ様なこともなくなる。最後に余り氣のつかないことでもかなり重要なことは、下降の場合、吹雪・霧等で極端にスピードを制限する必要がある個處、或は負傷者の生ぜる場合極めてゆるい速度で下る時に此が重要な役割を演ずる。もう一つ、グライトワックスを塗つたまま登れることがある。以上は皮を用ひた場合の有利な點である。

不利な點は、エツゼングが効かなくなること、登高の途中に小さな下りのある場合滑走が鈍ること、スキーの滑りが悪くなる爲脚がより多く疲労すること、(しかしこれは後滑りを開脚や横登りによる疲労に比すれば甚だ僅である) 及吹雪の中などでは殊にその取はつしが面倒であること等である。しかし是等の不利な點を相殺しても、尙有効であることは明かである。そして今日以上にワックスの研究が進んだとしても、登山スキー家は雪質の變化につれていちいちワックスを塗り替へてゐる暇まではないであらう。故に若し以上の事柄にも増して何か重大な理由がなければ、特に北海道に於てのみ海豹皮の不用なる譯はないのである。

嘗て、スキー部の先輩に依つて、海豹皮の効果について試験されたことがあつたさうであるが、その時の結論は、結局北海道では海豹皮を必要としないといふことになつたのであつた。それ以來北海道のスキー家は、絶対に海豹皮を顧なく

なり、その効用について無關心になつて了つたのである。當時の所論が如何なる理由に依つたものであるか、私は精しいことは知らないのであるが、推量を以つてすれば、それは恐らく北海道の地形と雪質に基いたものであつたと思はれる。けれども當時と今日とは、すべての事情がひどく變つて來てゐる。例へば當時にあつては、手稻山・奥手稻山などは、スキー登山の對稱としては、かなり重く見られてゐたのである。然るに現在では、それらは最早單なるスキーゲレンデに過ぎない。この卑近な一例を以てしても、如何に此の數年間に於てスキーが普及され、一般化され、盛んになつたか、そしてそれにつれてのスキーに依る登山の發展も察しられる。そしてその當時正しいと考へたことも、今日では穩當でないと思へられる場合もあり得るのであらう。

北海道の雪質が、内地のそれに比して良好な状態にあることは事實である。しかし是は、海豹皮不用の理由とは少しもならないのである。何故ならば、海豹皮は如何なる雪質に對しても有効であるからである。(又若しかりに良雪には海豹皮は不用であるとしても、特に北海道だけに是を不用とする理由とはならない。雪質は比較的の問題であつて、一月に北海道でも雨が降ることもあるのであるから。)次に地形の問題であるが、此も海豹皮不用の理由となる點は少しもないのである。若し海豹皮を絶対に必要としない様な地形であれば、それを變化に乏しい平坦な、スキー的にも實に興味の少ないものであらう。良好なるスキー地として一般に紹介されてゐる青山温泉・新見温泉附近の、更に札幌・小樽附近の僅々一〇〇米内外の山だけを滑り廻つてゐるのであれば、勿論海豹皮を使用しなくても十分である。(現に今迄それでやつて來たのである)しかし、北海道にも、更にさらに登るべき、より高き、より魅力ある山岳は決して少くないのである。そしてこれらの山岳にスキー登山を試み様とするならば、私達は必ずや海豹皮を用ふることの必要を知るのである。左に私は、私達の仲間の經驗に基いて、殊に海豹皮を使用することの極めて有効なる個處の實例を二三擧げてみようと思ふ。

蘆別岳 山部二十五線より一〇八八米までの登路及それよりの山稜。殊に一〇八八米迄は、實際は地圖で想像したより

は急傾斜で、ブツシユ稠密な登降共に悪い處で、海豹皮の極めて有効な個處である。

夕張岳 トナシベツ川本流から、夕張岳より東走する山稜の第二のピーク（一二三四米）までの登路及それよりの山稜
暑寒別岳 山の神のテレスより暑寒別岳に至る尾根傳ひ。

蝦夷富士 半月湖登山事務所より、夏登山路に沿ひての登路。殊に森林帯を抜ける迄。

黒岳 層雲別温泉より夏登山路に沿ひての登路。殊に展望臺（一〇〇〇米）迄の登り及二十丁目（約一五〇〇米）迄の尾根傳ひ。

ニセイカウシユベ山 層雲別村よりピーク一一〇七米を經る登路。殊に一一〇七米迄の登り。

天汐岳 留邊藥川支流岩内川最後の二股より、主山稜に至る迄の登路。

石狩岳 石狩川上流前石狩澤よりの登路。

尙札幌附近の連山でも、百松澤山・砥石山・札幌岳等の普通の登路も使用の範圍に屬するし、手稻、奥手稻などにして
も、勿論有効であることは言を俟たない。殊に積雪が少くて、ブツシユに苦しめられる時に於ては尙更である。

結論すれば、北海道に於てもあらゆるスキー登山に於て、最も合理的に、忠實なる登山を營まんとするものは、輪鏢を
用意すると均しく、常に海豹皮を利用すべきであると思ふ。

（一九二七・十二・十五記、石狩岳の項二八・二・十四追記）

大島亮吉氏山岳旅行中奇禍に遭ひ
逝去せる報に接し哀悼この上もな
し此處に謹みて弔意を表す。

昭和三年三月二十九日

札幌市北四條西十二丁目

山とスキ一の會

海外通信

此の競技の内容及び組織については已にアサヒ、スポーツに
大要を書いたから此處では略して、競技そのものに附随した感
想のそれこれを取まとめて書くことにしよう。

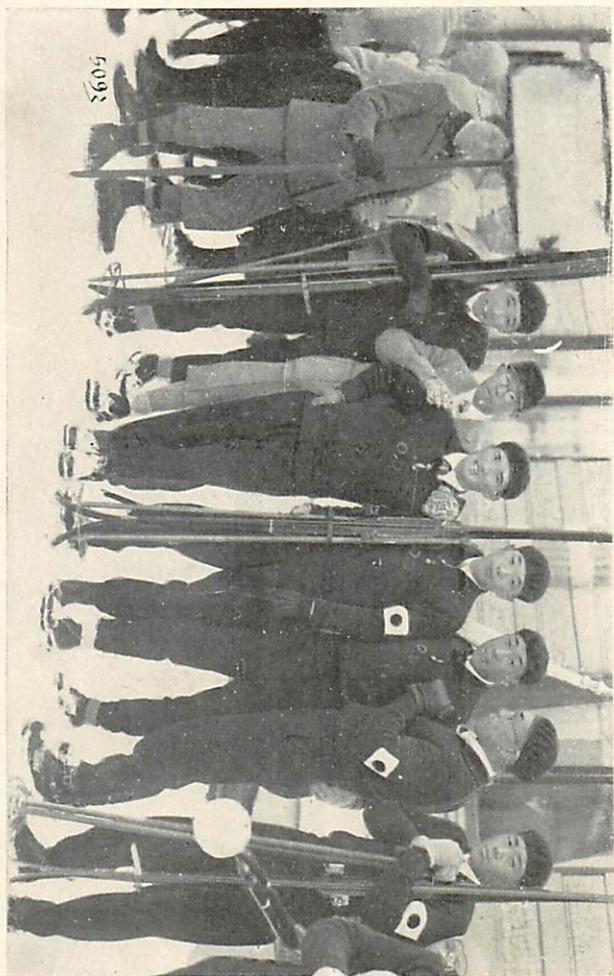
此コルチナの土地は昨年F. Q. S.の國際スキー競技大會の
開催された土地であることを私達は、已に知つて居たから
相當のスキー地として良い處とは考へて居たが、成程來て
見ると良い地形にある。そして此處はサン・モリッツの様
な所謂遊山客の様な人よりも本當に健康を精進にウインタ
ースポーツをやりに来て居る人が多い様だ。サン・モリツ
ツのキラビヤカさを見ることが出来ないけれども田舎スタ
イルの見榮えしないハイカラさに地味さを加えて、グンダ
ン轉けながら勇敢に滑つて居る滋味が却て、たのもししい位
に思はれる。そして又人づきが良い。サン・モリッツ邊り
ぢやまるで鼻であしらうスキー客が多く、そしてそうした

連中が馬車でスキー場へ行つてコロリと滑つて馬車で歸つ
て行く態である。ハデなスタイルと身コナシは成程良いが、
スキー客の態度がキザだから嫌な氣がする。

此大會に出場する爲にサン・モリッツからミラノへ着い
た時には、わざわざ伊太利スキークラブの會長の伯爵ボナ
コツサア、アルドウさんは、テクで私達を停車場に迎へて
下されて、それから丁度今タイタリーの選手十數名がコー
チャー（ノールウエー人、レスリガード）と共にコルチナ
へ立つから一所に行けと云ふ譯で、連中のホテルへ一時發
車まで落つくやうにお話下され、そしてそのホテルで始め
てその人達に紹介された。とても皆好意を以て迎へてくれ
たこと、それからすつかり選手一行と近づきになつてコル
チナへ來ることが出来た。伊太利の選手で此二月のオリム
ピアードに出る、ヴェンチー、デメッツなどもすつかり
近づきになつちやつた。

コルチナへ來て見た處、今度の競技出場の學生選手の内
では、吾々が先着の様であつた。

コースはルールで競技前夜まで發表にならないと云ふの
で、デメッツ、ヴェンチー君等に適當なコースを選んで貰



入場式前の日本選手一行

つて練習した。サン・モリッツで麻生君に選んで頂いた私達のコーチャー、オステル、ルードと云ふノールウエーの選手は、一所に連れて來ることも出来なかつたし、此處で特別選手のコーチャーを選ぶ譯にも行かず、少しづつをレスリガード及びデメツツ、ヴェンチイ君等に教はつて、他は全く自力でやらざるを得なかつた。僕自身も参加しやうかなんて生意氣な考へを起したが、とてもそんなこととして居ては自分の体が心配だし、それでなくとも仕事が手遅れになり勝なので、そのことは夢想にした。

コルチナへ來てからフィンランドのスキーを一、二臺購つたが折つてしまつたので、ラングラウフで使用したスキーは、凡て母國から持つて來たスキーのみであつた。

レスリガード君はわざ／＼競技の前夜私達の宿まで來て私達の爲にラングラウフの特にワツクスについての注意を與へてくれた。

レスリガード君は、ノールウエーでも一流で、ノールウエーの現役でも相當の處らしい。此コルチナで毎日見て居るが、午前はイタリーオリムピック出場の軍隊選手を連れて十八軒のトレーニングに行き午後はコルチナのシャント

エで四、五本位四〇——五〇米のジャムプを鮮かに立つて宿に歸るといふ程元氣な選手である。年は二十六才と云ふが、とても二〇臺には見えない。ドイツ語がペラ／＼で話をする。とても痛快な大聲で話して、判り易く僕達に物事を教へてくれる。本當に良いコーチャーだ。技とそして頭のある選手である。そして元氣そのものゝ處が何と云つても好きだ。皆が、こんなコーチャーを日本へ呼びたいと引きに言ひ合つて居る。金の二、三千圓もあれば容易に日本へ呼べると思ふが。日本スキー聯盟に金のないのが悲しくなる。さう云つちや麻生君にすまないがサン・モリッツの私達のコーチャー、オステルルードなんか問題ぢやない。私達のスキー競技はラングラウフが皮切りであつた。スキープログラムは大体次の様に組まれて居た。

一月廿三日(月) ザル、ムニチビオで夜六時より開會式、ラングラウラコース圖の説明、抽籤。

一月廿四日(火) 午前九時十六軒開始。

一月廿五日(水) 午後六時滑降競技及スラローム、ジャムプ抽籤、先日の場所。

一月廿六日(木) 午前十一時滑降競技開始。

一月廿七日(金) 休

一月廿八日(土) 午前十時スラローム競技。

一月廿九日(日) 午後二時ジャムブ競技。

x

一月廿三日の晩には、参加國各選手及び代表一堂に會し町長さんらしいのが開會式を宣した。

その演説は伊太利人にすら難解の演説らしかつたが、要するにイタリーのファシストを賞めて、そして此學生競技で青年の意氣を發揚されたいと云つた意味らしかつた。此處で始めてレスリガード君を介してノールウエー學生選手諸君と吾々仲間とが堅い握手を交した。そして又スウェデンの選手とも。

抽籤は代表者で良いことになつて僕が居残る。

競技参加者三三名。

日本四名、ノールウエー五名、イタリー五名、スウェデン二名、瑞西四名、チエツコ六名、ユーゴースラビア三名
フランス四名。

抽籤の結果は高橋君が二番、矢澤君八番、永田君九番、竹節君二十八番であつた。

(廣田生)

寫眞說明

一、手稻バラダイスヒュツテ前に於かせらるゝ秩父宮殿下。
殿下はこの日激しい吹雪の中を手稻山の頂上を究められました。

二、ヘルペチャヒュツテに向ふ途中奥手稻ユートピアに於ける御一行。(前より三番目が殿下)

三、サンモリツツに開催せられたオリンピックスキー競技大會入場式前の日本代表選手。(左より伴、廣田、竹節、矢澤高橋、麻生、永田の諸氏)

四、オリンピックスキー競技大會五十軒競走に出場せる日本代表選手永田實君(上) 所要タイム六時間二分四十二秒
同競技に首位を占めたる Hellund (Sweden) 選手(下)
所要タイム四時間五十二分三十七秒

青 山 温 泉

北海の靈峰マツカリヌプリに

連亘するシリベシの山稜――

山稜を飾るタンネンホイメと

ブルフェルシユネー

東洋のサンモリツツと

稱せらるる

理想的スキー地！

函館驛本線昆布よ一里半

札幌よ一里五時間

函館よ一里七時間

豫約募集

北大山岳部年報

第一年

一昨年秋私達の山岳部が創設されてから約一年半の間に於ける私達の歩みをこゝに跡づけてみることに成りました。極めて貧しい記録ではありますが等しく山を愛される方々の御一讀下さる事を切に希望致します。内容体裁等今迄に決定しましたものは左の通りです。

| | | | | | |
|-------------|-------|--------|-----------|--------|--------|
| 冬の十勝連峯 | (研究) | 和辻 廣 樹 | 北千嶋の印象 | (アラート) | 伊藤秀五郎 |
| 石狩岳スキー登山 | (登山記) | 小森 五 郎 | 三國山より石狩岳へ | (紀行) | 山口 健 兒 |
| 三月のトムラウシ山 | (同) | 坂本直行 | 熊根尻岳 | (同) | 渡邊 成 三 |
| 冬のニセイカウシユベ山 | (同) | 原 忠 平 | 十勝岳より大雪山へ | (同) | 徳永 芳 雄 |
| 五月の石狩岳 | (同) | 野中保次郎 | 漁岳・オコタンペ湖 | (同) | 外山勝四郎 |

北海道スキー登山の發達

(登山史) 伊藤秀五郎

日高の山

(同) 井田清

三月の槍、穂高

(登山記) 須藤宜之助

阿寒行

(同) 島村光太郎

斜里岳

(同) 井田清

山からの言葉

(感想) 井田清

ニベツツ山

(同) 野崎健之助

若き登山家の一小言

(同) 伊藤秀五郎

スキー登山の對稱

(小論) 伊藤秀五郎

ヨーデルニツツ

(同) 井田清

小さな岩登り

井田清

Gaule Marsch

(同) 井田清

大陽・雪・スキー

(スキー旅行記) 伊藤秀五郎

北海道の春

(スケッチ) 伊藤秀五郎

年報その他譯章・詩・カット・圖版・寫眞版約十五葉等

体裁

菊版・カット・英國製コットン・ポイント活字組約二百頁

價格

豫定實費 金壹圓八拾錢

刊行期日

五月下旬

申込期日

豫約御希望の方は四月末日までに左記宛御申込下さい。(但豫約金不要)

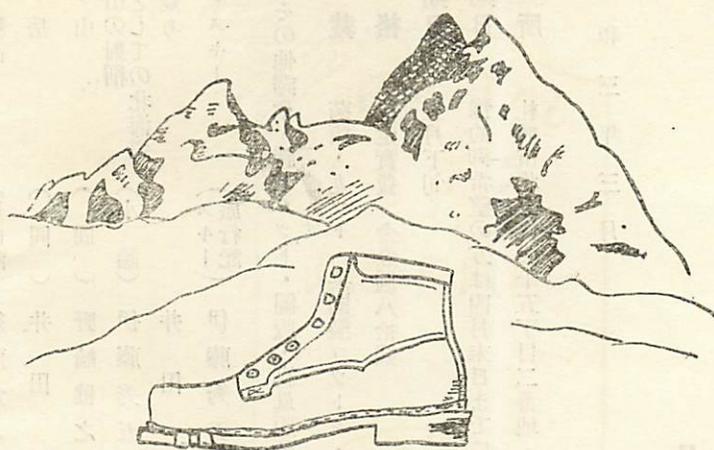
申込所

札幌市北三條西十五丁目二番地・和辻廣樹方北大山岳部年報係

昭和三年三月

北海道帝國大學文武會山岳部

北海帝國大學キス一部及同岳部御用

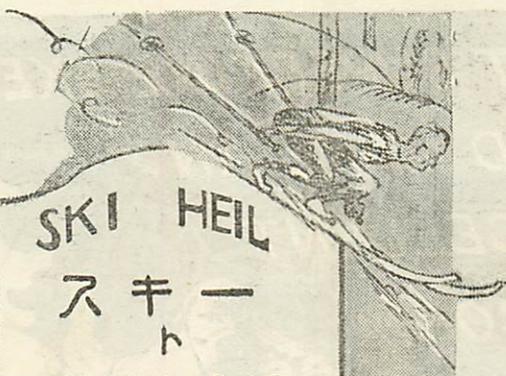


登山靴とキス靴

各種

札幌市南一条十番街

木本靴店



SKI HEIL

スキ一
ト

其用與全般

中野商店

スキ一即スバ

第一
級產
斯大

札幌



GET SUPERFINE SKEES.
AND MAKE AN
EXCELLENT
RECORD!



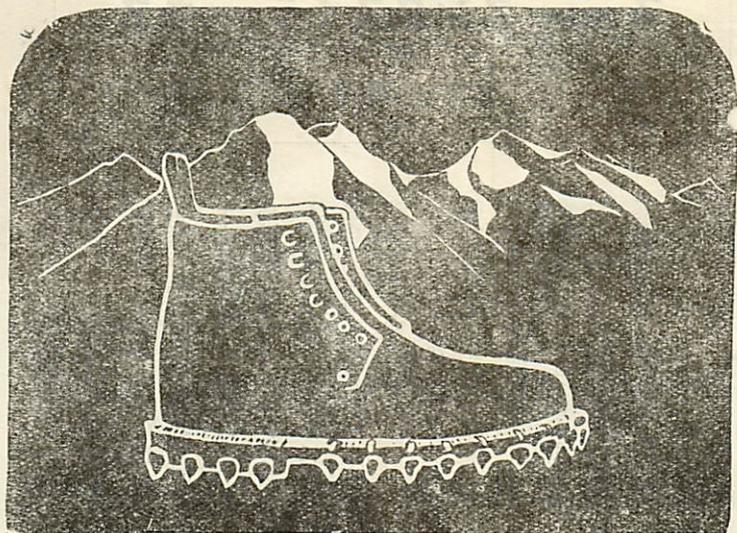
具用其ト一キスルナ秀優

樽 小

店 具 動 運 屋 梅

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ

一等賞金牌受領



登山靴とスキ一靴

東京市本郷區四丁目目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一七二番

集稿遺郎太源村岡

スーレ・スタスイデーキス

圖 二 價定・頁百三 ントツコ

吾國最初の万国オリンピックのスキー派遣選手の一
人として雄々しい活躍を期待された彼だつた。今や冬
期オリンピックにての彼の僚友等の情報が日々に傳へ
らるゝ時、この遺稿集を世に送る事になつた。このス
キー界劃期的の時期に當つて、彼の日頃の血出る如き
体験から出たデイスタンスレース並びにスキーに對す
る研究は當然一冊の本に編まるべきであつた。只遺稿
集の名を冠しなければならなかつたのは何とした運命
であるかと思はれる。

さうしたこの集には、彼がスキーに志して以來の貴
重な研究を「スキー・デイスタンス・レース」なる題
名のもとに全部網羅した。スキー・レースの走法、練
習法等々のレースに志す人は勿論、又急速に進展しつ
つあるスキー界の歴史に興味を持たれる人、否スキー
に愛を有せられる凡ての諸氏の御讀み下さる事を希望
する。

「彼はスキーを愛しスキーに生きた。」

。したれま込申宛係出版稿遺急至ばれな版定限、定額の版出旬下月三

地番二目丁二十西條四北市幌札

部 版 出 一 キ ス と 山

番 五 九 四 八 樽 小 座 口 替 振

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことを願ひます又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込が、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六册分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和三年三月廿八日印刷

昭和三年四月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 井 出 英 次

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

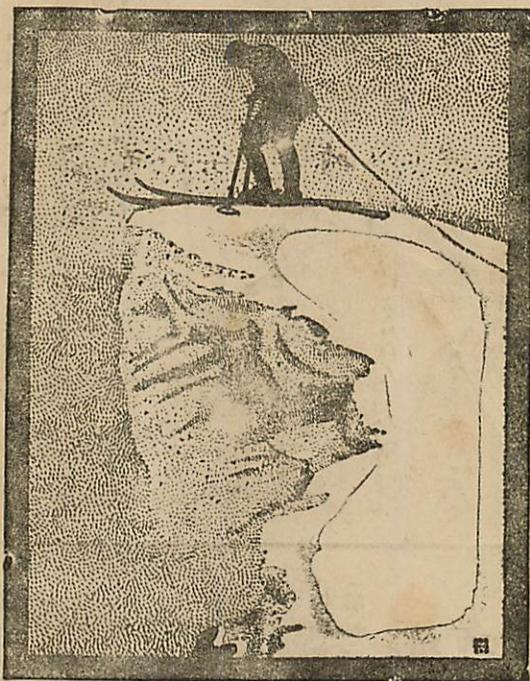
北海道札幌市北四條西十二丁目一番地

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo
No. 80. Aprilo 1928. Sapporo, Japanujo.

美滿津特製
スキー用具と山の道具！
其他
アイス・ヤツト及びボツブスレー
アイス・スケート新荷着！



合名會社
美滿津商店

東京・本郷・赤門前

(切.....取.....線).....

東京本郷赤門前

美滿津商店御中

下記の所へ型録「秋より冬へ」郵送
せられたし。

姓名
住所

東京本郷赤門前

美滿津商店御中

下記の所へ型録「春より夏へ」郵送
せられたし。

姓名
住所

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和三年三月二十八日印刷納行
昭和三年四月一日發行

山とスキー 第八十號 (倍大號)

定價金六拾錢